

東アフリカの“牛複合”社会の近代化と牛の価値の変化－
キプシギスの「家畜の貸借制度」(*kimanakta-kimanagan*)
の歴史的变化と今日的意義をめぐって

小 馬 徹*

The Modernization and the Change of the Values of Cattle
in a So-called “East African Cattle Complex” Society:
the Historical Changes and the Modern Meanings of
the *kimanakta-kimanagan*, Lending-borrowing of Livestock
among the Kipsigis of Kenya

Toru Komma, *Ohita University*

This essay describes and analyzes how the *kimanakta-kimanagan*, or a custom of lending-out/borrowing of livestock including cattle, among the Kipsigis people of Kenya has changed through the drastic acculturation they have consecutively experienced through out this century after they came into contact with the European settlers in the Kenyan “White Highland”. Moreover, this essay explains how the values of cattle have changed and survived in the Kipsigis society which is among so-called “East African cattle complex” societies, with the special reference to the *kimanakta-kimanagan* system.

The Kipsigis have been generally regarded as a “model” East African people in that this traditionally pastoral people very successfully adapted themselves to the colonial and capitalistic economy by rapidly adopting maize cultivation with plough and by shifting from communal land tenure to private land tenure. As a result, it is claimed, they lessened their pastoral attributes in large and cattle, around which almost all the traditional values of the people had centred, descalated to a simple article of commerce which was even less valuable than maize.

It may be true that some characteristics of the traditional Kipsigis culture centred around cattle declined, but it can not be denied that the *kimanakta-kimanagan* system survives well in the course of the acculturation and that cattle still maintain importance as multiple media through which social relations are structured.

Traditionally, the *kimanakta-kimanagan* contract was made on individual base among age-mates, affines, relatives, clansmen etc., and a cow, she-goat, or ewe was sent out as long-termed loan so that it could supply milk and blood to drink to the debtor's family. This system contributed to reduce inequality in the number of livestock, which were the then primary means of survival, held by individuals as well as possible discontents among the people, and therefore to maintain the unity of the acephalous and non-segmental Kipsigis society.

* 大分大学

Researchers are apt to underestimate, or even neglect, the significance of the existence of the highly transformed modern *kimanakta-kimanagan* system, judging from the devaluation of the relative economic value of cattle. The system has been flexibly amended and developing new variations of practice in accordance with the needs derived from the modernization. But thus, all the more, it makes for minimizing the inequality not only in cattle holdings but also in their economy as a whole in the modern Kipsigis society. This may be the very reason the system survives the radical changes of their life style. In other words, it achieved its involution in this way.

目 次

I. 序

1. 論文の目的と方法
2. 牛牧民キプシギス
3. 伝統的な牛の価値
- II. ヨーロッパ人との接触前後のキマナガン制度の属性をめぐって
 1. キマナガン契約の古典的規則
 2. 山羊／羊のキマナガン契約
 3. キマナガン契約の動機と目的
 4. キマナガンの語義とペリスティアニの概念規定との矛盾
 5. ナンディの1940年代のカップティッチ制度
 6. キプシギスの伝統的な土地保有制度と伝

統的なキマナガン制度

- III. ヨーロッパ人入植以降の土地保有制度の変化とキマナガン制度への影響
 1. ヨーロッパ人との最初の接触から第1次世界大戦まで
 2. 第1次世界大戦から1930年まで
 3. 1930年からケニア独立（1963年）前後まで
- IV. 今日のキマナガン制度の諸相と意義
 1. 変化の諸相
 2. セトゥルメント・スキームのもたらした階層化とその影響
 3. キマナガン制度と女性、教会、若者
- V. 結 論

I 序

1. 論文の目的と方法

キマナクタ＝キマナガン (*kimanakta-kimanagan*)¹⁾ はケニアの牛牧民キプシギスの間に古くから行われてきた、牛を初めとする家畜の長期にわたる貸借制度である。

この論文の目的は、この制度が植民地化に伴うヨーロッパ人及びヨーロッパ文化との接触やケニアの国民国家としての独立など、ここ80年程の間にキプシギス社会が経験した目醒ましい社会変容の中で、それ自体どのように変質したかを、またこの制度が今日でもキプシギス社会でよく保持されている理由と社会的な意義が何であるかを考究し分析することである。

さらには、以上の主旨に沿った論述を通して、

いわゆる「東アフリカの牛複合」の名が冠される伝統的な牛牧社会の1つであるキプシギス社会において、上記の歴史過程で牛の持つ価値が蒙った変化の一端を、主として経済的価値と社会的な価値の側面から考察する。²⁾

まず、キプシギスランドの植民地化からケニア独立までの状況に関する考察には、キプシギス自体及びキプシギスと言語・文化・社会的に極めて近縁で、歴史上一貫して同盟関係を維持したナンディを研究した3人の先輩人類学者のモノグラフを中心に用い、私自身が現地調査で収集した資料を補助的に用いる。

他方、ケニアの独立から今日に至る状況については、主として、私自身が4次、足かけ6年にわたる現地調査で得た³⁾ キマナガンの諸事例の記述と分析を通して考察を進める。⁴⁾

2. 牛牧民キプシギス

キプシギス（推定人口約60万人、1979年）は、ヴィクトリア湖東部のカヴィロンド湾の東に接する標高約1,500～2,100メートル程の高原地帯に住む。今世紀初頭、彼等の伝統的な居住地はボックス・ブリタニカによって他民族の領有地との境界を固定されたが、それは今日のリフトバレー州のケリチョ・ディストリクトとほぼ重なりあう。ケリチョ・ディストリクトの南に隣接し、マサイ人の居住地と見なされているナロック・ディストリクトにも早くからキプシギスの人々が移住を開始し、現在では同ディストリクト内にもかなり大きな人口を擁している。

言語は、パラ＝ナイル語⁵⁾系のカレンジン諸語に属する。人々は、外婚単位である200以上の非分節的な氏族に分れるが、氏族は固有の領土を持たず、氏族成員は全土に拡散し、他氏族成員と混住する。

基本的な社会＝経済的な単位はコクウェット (*kokwet*) と呼ばれ、数10戸から成り、集落を作らない散居的な近隣集団である。法的な機能もまた氏族ではなく近隣集団が担い、遺産相続以外の紛争については、近隣集団の成人男子で構成される「長老会議」が裁定を下す。「長老会議」は、現在では、ケニア国の法＝政治体系の末端機構としても正式な位置付けをもち、その裁定は二重法制のもとでも十分に尊重されている。

伝統的に、名前が循環して現われる7組の年齢組が全土を横断して形成され、男性は所属する年齢組に基づいて少年、戦士、長老の3つの年齢階梯に分けられた。従って、この年齢組＝年齢階梯複合体系は戦闘組織の形成にも直結し、固有の名称をもつ4つの軍団のいずれかに男系出自に基いて所属していた。

全土を横断し、かつそれぞれに独自の構成原理をもつ年齢組＝年齢階梯体系、軍団、氏族への三重の帰属が個人のキプシギスとしてのアイデンティティの核であった。各個人の民族への忠誠は3つの次元の各構成要素に分散された忠誠の多様な組み合わせによって具体的に統合さ

れて肉化することにより、その組みあわせが僅かずつずれながら重なりあって織りなす綾目、民族内での紛争発生の可能性を極小化して、無頭的なキプシギスの、民族としての緩やかな統合を実現していた。だが今日では、戦士階梯は実質的な機能を失ない、軍団も形骸化して、副次的な儀礼＝宗教的な機能を僅かに留めるに過ぎない。

歴史を見ると、現在のキプシギスが民族として形成される過程で中核になった人々の祖先である原カレンジンが、エチオピア方面からケニア北部のバリング湖西北岸辺りに移住し、更に、恐らく17世紀初頭かそれ以前にバリング湖周辺から小人数の軍団に分れて南下して、やがてその移住の過程で現在のセベイ、マラクウェット、トゥゲン、ケイヨ、ナンディ、キプシギス、トリックなどの諸派に分れたと考えられる。⁶⁾

現在のキプシギス形成の核となった人々あるいは原キプシギスは、原ナンディと相携えて最も南まで移動し、17世紀中葉に現住地ケリチョ・ディストリクトの北端ロンディアニィ辺りに達したものと推測される。⁷⁾

彼等は優勢なマサイにおされて暫くの間マウの竹林地帯に雌伏するが、東アフリカ地域の先住民であるいわゆるソドロボの一派である狩猟採集民オギエクの小集団を次第に吸収してゆく。18世紀初頭には再び南下を始め、ナイル語系のルオ、バントゥ語系のグシイ、パラ＝ナイル語系のマサイなどの諸民族との間の打ち続く戦闘を最終的には勝利に導き、それらの民族のあとを追いつつ急速に領土を拡大するとともに、グシイの人々を大量に編入した結果、19世紀末には人口も3～5万人に達していたと推定される。

キプシギスは、伝統的には——少くともヨーロッパ人に屈服する1905年頃までは——シコクビエとキビ及び僅かな野菜の粗放な栽培も付随的に行う移動牛牧民であった。モソップ (*mosop*) と呼ばれる高地に点在する比較的定住性の高い近隣集団には、女性と老人それに子供が住み、防衛のために少数の既婚の戦士が配属されていた

た。女性が、ここで穀物と野菜の小規模な焼畑栽培に従事した。雑穀は固粥として食べられると同時に、儀礼的にもまた近隣組織内部での労働交換の媒介としても重要なビールに加工され消費された。山羊／羊はそれぞれの家の子供と娘達によって近隣集団の近くで、放牧された。

村には極く少数の牛が残されるだけで、未婚の戦士達が、近隣組織から15～20キロメートル程の所に広がる、やや標高の低いソイン(soin)と呼ばれる草原で牛のキャンプ(kaptich)を設営した。牛は共同のキャンプに収容され、割礼前の少年達が牛の放牧を行い、戦士達が護衛に当たったが、放牧はあくまでも家単位で行われ、全ての家の家畜が一つの牛群に混じり合わせられることはなかった。キャンプの戦士達に穀物を届け、牛の乳や血を持ち帰るのは娘達の役目であった。また、野生動物の狩猟や養蜂も食糧を確保するうえで重要な仕事だった。

3. 伝統的な牛の価値

牛は、まず、乳や血や肉を人々に提供する。特に牛放キャンプに住む戦士達にとっては、牛の乳と血と肉が主要な食糧であった。他部族から略奪した牡牛を食することはあったけれども、一般に、飼養している牛を肉を取るために殺すことはなく、食べられるのは犠牲獣として供犠された牡獣(主に去勢牛)の肉だけであった。⁸⁾牛の皮は様々な用途をもつ敷皮や固粥を盛る四角い平皿などに用いられ、また衣服や装身具、様々な道具、袋物などの最良の材料であった。今日では牛皮の衣類としての用途は儀礼用衣類を除いて失われたが、牛の身体各部位の素材としての重要性は損われていない。

牛は、何よりも、まず保存し増殖できる唯一の財産として重要であった。⁹⁾

婚資や殺人に対する血償は牛の形で与えられた。即ち、牛はその交換を媒介として新しい家庭が作られ、また婚姻を絆とする氏族間の政治的同盟関係の形成と維持の媒介となり、更には、損われた政治的同盟関係を修復する媒介ともされたのである。

今日でも、依然として氏族が血償の支払いと受け取りの単位であり⁹⁾、殺人者と同じ支氏族に属する戸主は牛1頭、同氏族内の別の支氏族に属する戸主は山羊または羊¹⁰⁾1頭を醸出する義務があった。今日でもこの義務はそのままであるが、牛1頭の代りに100シリング、山羊／羊1頭の代りに50シリングを支払ってもよいとされている。¹¹⁾

婚姻は、今日では氏族同志というよりもむしろ家同志の政治的同盟関係形成の契機と考える方が妥当である。¹²⁾キプシギスの婚姻慣行は従来、近隣諸民族と比較すると、はるかに個人の自由な選択を抑圧してきたと考えられるが(Kyewalyanga, 1977: 24-34 et. al), 今日では、若い男女の個人としての意志を優先させた「駆け落ち」を先行させる形態も増加しつつある。しかしながら、今日でも婚資が依然として牛及び山羊／羊で支払われ、現金はあくまでも付随的な要素であり、その額も支払われる家畜の評価額に比べてはるかに小さいのが普通である。¹³⁾

本稿で詳細な検討を加えるキマナガン制度は、様々な間柄の個人が、牛を媒介とする、期限を特定しない長期にわたる貸借関係の複雑な網目をキプシギス社会全体に張り巡らせて、キプシギスの統合を高め維持する機能をもっていると考えられる。

牛は、儀礼的な価値の中心でもある。世界は、理念的に上と下の2つの部分に区分され、“家屋の戸口の外のすぐ東側に作られる「祭壇」の基部に置かれる牛糞→天→唯一神アス→雲→雨→草→牛→牛糞”という回路を通じて、世界の2つの部分がコミュニケートされるというのが、キプシギスの世界観と儀礼の中心的な枠組みである。

牛は、いわば世界の2つの部分の接点に位置付けられ、両者を媒介する。この2つの部分の距離が遠すぎたり近すぎたりして混乱が生じ、それによって世界内に不幸が起きる場合には、人々は牛を供犠することによってこのコミュニケーションの回路を通じてカミに祈りを捧げ、世界の2つの部分の正しい位置関係を回復して、

幸な状態へ復帰しようと試みる。それ故、このコミュニケーションの回路を構成する牛の食物（草、水、塩土）、牛の肉体（肉、皮、脂）、その生産物（乳、血）とその加工物（バター）、さらにはその排泄物（糞、尿）がいずれも高い儀礼的な価値をもっており、諸々の儀礼で広く用いられている。

今でも人生の最大の関心事であるイニシエーションの諸儀礼では、大切な秘密である民族の歴史と知恵が成人しようとする少年少女に授けられる。これらの諸儀礼のライト・モチーフは、少年少女がこの機会には「湖の獣」と呼ばれる牛に飲み込まれ、牛として“再生する”（*sigis*）ことである。これは、原キプシギスであるミオット（*Miot*）の民がバリング湖岸で牛を得て牛牧民となった始原の歴史を体現することであると同時に、一人前のヒト（*m. kipsigisindet*, *f. chepsigisindet*）となって、上記のコミュニケーションの媒介者である牛と同化されることによって、上と下の世界の2つの部分の調和の中に正しく位置付けられることの演劇的で象徴的な表現ともなっている（小馬、1983a）。さらに、牛は言語的な価値や審美的な価値の中心でもある。キプシギスの色彩名称は、基本的には牛の多種多様な体色と模様の分類を体系化したものであり、万物の色彩もこれに準拠して分類されている。

男性は牝牛、女性は牝牛、子供は仔牛と呼ばれ、成人の男子に与えられる尊称である *arap* は、「～の仔牛（幼獣）」を意味する。また人々はかつて自分のお気に入りの牛の名で呼ばれた。こうして、牛とヒトと世界とが言葉を媒介として重ね合わされるので、特定の牛への言及はたちまち個人と社会と森羅万象へと詩的なイメージの翼をひろげる。¹⁴⁾ 戦士達は牛と共に一日を送り、お気に入りの牛に口笛を聞かせ、立琴や笛を奏で、歌を捧げた。その牛の死は（今日でも）限らない悲嘆を招かずにはおかないのである。

伝統的な人生の目標は、一頭でも多くの牛を手に入れ、それを婚資として用いて一人でも多くの妻を娶り、一人でも多くの子孫をもうけて、

彼等に囲まれて幸のうちに年を重ね、彼等の男系子孫の中に自分の魂が再来することの深い確信の中に安らかな死を迎えることである。大きな牛群は、彼に対するカミの恩寵の証しであり、富と権威の象徴でもある。このように、牛は、情緒的な価値の中核でもあった。

ヨーロッパ人との接触の初期段階で、キプシギスの人々にとって牛の伝統的な価値が何時頃まで維持され、何時頃どのように、またどんな速度で変化を蒙ったかを直接的に観察して記録した纏まった資料はない。この点に関して、1937年に現地調査を行ったペリスティアニは、当時においても牛は子供に次ぐ大切な価値であり、「経済的」にみて、授受可能な投資の「唯一の形態」（*Peristiany*, 1939:149-150）であり、更に牛はキマナガン制度を通じて個人の名声を広め社会的地位を高める手段であるとし（同上:150）、それ故に「トウモロコシを売ったり、ヨーロッパ人の農場で働いたりして得た儲けは牛に投資される」（同上:149）と簡潔に述べている。

因みに、キプシギスとあらゆる側面で極めて近似する¹⁵⁾ナンディの1940年代後半の状況について、ハンティングフォードは次のようなかなり具体的に詳細な記述を残している（*Huntingford*, 1950:38-39）。

ナンディは、人生の第1のそして永遠の関心を牛におく人々である。今日ナンディが農耕に費す時間と労働量を考える時に、ヨーロッパ人はこの事実をつい見すごしてしまいがちになる。ナンディは、山羊や羊と同様多数の牛を持つばかりでなく、彼等の人生の全てが牛に集中されている。（中略）。彼等の見方からすれば、農業は経済体系で副次的な役割を果たすに過ぎない。（中略）。一日の大部分は、たいがい岩の上に腰をおろして牛達をじっと見つめているとか、一本足で立って牛達に口笛を吹いて呼びかけているといった、ヨーロッパ人が「怠慢」と呼ぶ仕方で過ぎられるけれども、ナンディにとっては、見かけ上は何

もしていない訳だがじっと心を集中したこの状態が「仕事」なのだ。(中略)。そうすることによって、ナンディの心は刺激され、牛の数を増す可能性を思いめぐらし始める。牛はこのように、ナンディを駆り立てる唯一の刺激源だ——それが彼等をかつては(他民族の牛の)略奪に導き、今日ではヨーロッパ人の農場から牛を盗ませる原因になっている。

ハンティングフォードのこの記述は、1940年代後半のナンディの牛に対するセンチメントを巧みに要約している。ここから、同時代のキプシギスの牛に対するセンチメントをかなりの程度まで窺うことができると、ひとまず考えておきたい。¹⁶⁾

ペリスティアニィとハンティングフォードの記録を見る限りでは、ヨーロッパ人との接触の初期には、農耕がキプシギスの経済に占める重要性が増大したとはいえ、彼等がもっていた牛に対する価値観はかなりよく維持されていたものと思われる。

II ヨーロッパ人との接触前後のキマナガン制度の属性をめぐる

1. キマナガン契約の古典的規則

キプシギスのキマナガン制度を簡単ながら最初に報告したのはペリスティアニィである。彼は、まずキマナガン制度を次のように規定している(Peristiany, 1939: 151)。

この制度は、それによって1人のキプシギスが、互いに非常に遠く離れた所に住んでいる彼の別々の友人達の間に自分の牛を分散させることによって、牛を口蹄疫や敵による略奪から守ろうとするものである。

次に、彼は数行の短い記述で、1人の男の複数の妻達が互いに遠く住み分るという、キプシギスの居住制の側面とキマナガン制度とが同一の目的を持つことを示唆する。つまり、男が

2番目の妻を貰うと、年長の妻は彼女の長男と共に遠方に新たな家を建て、そこに住んで夫の牛の一部を管理する。男が新たに妻を貰うたびに同じことを繰り返す結果、男の牛はキプシギスランドの所々方々に分散されるので、疫病や敵の襲撃によって一度に失われることはなくなるというのだ(同上)。

ついでに言えば、妻の分住制度は、1人の男の複数の妻達の間の嫉妬を極小化する目的と機能を併せもっていたが、¹⁷⁾この制度が、牛ばかりか牛と等置されるかそれ以上の価値でもある子供及び妻が疫病や敵襲によって一度に失われることに対する危険分散にもなっていたといえる。

さらに、キプシギスの伝統的な結婚後の居住制の特徴も、拡大された家族である氏族の観点に立てば、1人の男の複数の妻の分住と同じ側面から理解できよう。マナーズは、彼自身の調査とトウェット(Towett: 1956)によりながら、従来カレンジン語系の諸民族の間では、結婚後の居住制が父方居住制だとされてきたけれども、実際には必ずしも一定の形式はなかったと主張している(Manners, 1967: 299)。¹⁸⁾「とくに、新居制は侵略者に対するそなえとして決して珍らしくなかった」(同上)。また、彼はキプシギスでは1930年代後半から1940年代、更には1950年代にかけて新居制が拡大したと考えている(同上)。マナーズは、この現象を土地私有の観念の拡大から説明しているが、当時依然として民族間での牛の略奪が珍しくなかったばかりでなく、逆にボックス・ブリタニアが「牛泥棒達の民族間協力体制」まで誘導している(同上: 308-309) 実情を考えれば、結婚後の新居制の拡大がやはり一族の牛を一度に失うことに対する安全弁になっていた側面も否定できない。なお、私自身の調査では、古くから新居制が普通だったようである。ペリスティアニィの挙げているキマナガン制度の規則(Peristiany, 1939: 150-152)を箇条書きにしてみよう。

- (1) ある人物の妻(達)の世帯(の全て)が十分な量の牛乳と血を供給するのに十分なだけの牛を持っている場合、「それ以後に

生まれる牛の半数をキマナガンとして²⁰⁾与えなければならない」。

- (2) キマナガン契約で仔牛を得たい者は、その誕生のずっと前から友人に予約しておいて、その仔牛が(離乳できるまで)成長したらすぐに引き取りに行く。
- (3) もし生まれた仔牛が牝牛であった場合受託者はその仔牛を2、3年育てた後、第三者の若い牝牛と等価交換する。
- (4) 預かった仔牛の子孫は2、3世代は自分の土地で飼うが、それ以降に生まれた子孫は、自らがキマナガン契約を結んで第3者に預託して構わない。この場合、最初に仔牛を預託した人物にあらかじめ断る必要はない。
- (5) 預託者は、自分が仔牛を預けた直接の相手から、(交換として)別の仔牛をキマナガン契約によって預らない。
- (6) 預託者が受託者に一旦預託した牛の返還を求めるには、自分の牛が死滅したとか、(盗まれ尽したとか)あるいは息子の結婚のために預けた牛を婚資として用いる必要があるとか、何かそれ相当の理由がなければならない。
- (7) (子孫を含めた)全頭の返還を要求できるのは、預託者の新しい牛囲いの牝牛の産んだ仔牛が次々と死んで育たない場合に限る。
- (8) 預託者が死んだ場合、彼の息子が返還を求める。その場合でも、少くとも子孫の1頭を受託者に残すことが極めて望ましいとされる。
- (9) 受託者は、預かった牛かその子孫の牛が死んだ時には、預託者に即座にその旨通知し、その牛の皮を(証拠として)返す義務がある。受託者は、これ以外には預託者に対して如何なる義務も負わない。²¹⁾
- (10) 受託者は、預った牛の乳と血を(全て)消費する権利を持つ。
- (11) 契約の当事者達は、たとえ第1妻や娘であろうとも、女性には決してキマナガン契

約について口外してはならない。

規則11は、女性が目先の利益についとらわれて、困窮時などに、預けた牛の返還を求めて男同志の友情を、ひいてはキプシギス社会の団結を損うことを防ぐためである。ついでに、ペリステアニィの触れていない規則を補足しておこう。

(2-a) 必ず受託者が牛を受け取りに来て、預託者の所から連れ帰る。決して預託者が受託者の所まで牛を連れて行ってはいけない。

(11-a) できる限り受託者本人がキマナガン契約で預かる牛を取りに行き、息子達にもキマナガン契約の成立を知らせない。

2-aの規則も、11-aの規則もキマナガン制度をよりよく管理するための規則である。預託者は、牛を放牧している息子の目をうまく誤魔化して、秘かに牛を受託者に渡す。息子と妻は牛を見失った咎を叱責されることを恐れて必死で牛を探し求めるが、父(夫)の叱責がそれ程手ひどくない事実からキマナガン契約によって牛が預託されたことを推測するばかりであった。

ところが、今日では、多くの場合それがキマナガン契約提結の動機になっているのであるが、自分の所有地が手狭で牧草が足りないために牛をキマナガン契約で他人に預かって貰う場合、預託者が受託者の所まで自分で牛を連れて行く。こうなると、受託者の妻や娘達にもキマナガン契約が判ってしまうので、日照りがひどくなった時に預かった牛が女達の干渉によって返されることにもなりかねない。

他方、古い規則がちゃんと守られていれば、受託者が自分の土地に連れて来た牛が、キマナガン契約に関係のある牛なのかどうか、たとえキマナガン契約に関係があるとしても、他人に預託していた牛(の子孫)が連れ戻されたのか、それとも他人から受託した牛なのか、彼の妻や娘にも判別できなかったのである。

キプシギスの父親は、自分の死の直前まで妻にも息子達にも財産を分与しない。²²⁾だから存命

中の父親の権威は絶大なものであり、父親と息子の間には常に潜在的な対立が構造的に存在する。それ故、息子が万一父親のキマナカイの預託先を知ると——特に父親と別の土地に住む息子の場合——父親に内緒でキマナカイを取り戻して処分することが往々に起る。この行為は「牛泥棒」である。²³⁾

キプシギスの間には、今日でも、自分の幾種類かの名前のうちでも、自分のお気に入りの牛と同じ名前の人々に最も広く知られている男性が時々いる。かつて男は、お気に入りの去勢牛と同じ名前では呼ばれるのが一般的であった。自分とお気に入りの牛とを——少くともある程度まで——同一視している老人達は、酔いが回ると、その牛の角の形を両手で模しながら、その牛の荒々しさや雄々しさを自分と重ねながら自慢する。かつては、同年齢組の者だけが集ってビール・パーティを開き、2人ずつが組になり屋内の西側と東側に陣取って牛の自慢較べをした。対戦相手が屋内の東西に隔てられるのは、酒席での節度ある振舞いを美德とするキプシギスではあるが、自分と同一視している牛の自慢合戦になると、殺し合いに及びかねなかったからだという。

キマナガン契約でやり取りされるのは、離乳したばかりの若い牝牛だけで、偶々受託する約束の仔牛が牝牛であった場合でも、その仔牛は2～3年後には必ず若い牝牛と交換されなければならない——規則2。牝牛でも成獣はキマナガン契約の対象にならなかったし、牝牛や去勢牛は全く対象外であった。

あと幾つかの規則を補っておく。

- (12) キマナガン契約で受託された牝牛の子孫である牡獣を去勢するかどうかは受託者の判断に委ねられていた。
- (13) 預託者が没しても預託者の子孫が牛の返還を求めてこない場合、受託者側は名乗り出て、牛を返す義務がある。
- (14) 受託者は預託者に無断で、預かった牛やその子孫を屠殺してはならない。この規則の違反は牛泥棒という重罪に当たる。

2. 山羊／羊のキマナガン

ペリスティアニィは、キプシギスにおける山羊／羊の存在価値を——儀礼的価値を除くと——低くみなし、むしろ牧草の若芽を食害するので、経済にとって破壊的であるとさえ言っている。彼は、山羊の乳が極く稀に女子供に飲まれるだけであり、山羊／羊はせいぜい「貧者の牛」として評価できる程度だとしている（Peristiany, 1939: 151）。

しかしながら、私のインフォマント達によれば、「貧者の牛」もそれ程軽視されるべきものではなく、昔から立派にキマナガン契約の対象となっていた。

伝承では、1980年頃、口蹄疫が大流行してキプシギスの殆んど牛が死に絶えた。またヨーロッパ人と接触してトウモロコシが普及するまでは、5～10年位の比較的短い周期で繰り返しいひどい飢饉に見舞われた。²⁴⁾

さらに、1905年のヨーロッパ人によるキプシギスの牛の大量没収と、1913年に集会的懲罰として行われた多額の罰金の取り立てはキプシギスの経済に手ひどい打撃となり、立ち直りには少なからぬ年月を要した（Peristiany, 同上: 4）。少くとも「予備の獣」(*subendo*)²⁵⁾として、この経済再建の過程では、山羊／羊も重要な資源であったはずである。実際、山羊／羊の飼養は、犠牲獣を確保することのほかに、定期的に採血して、血を飲用に供することをも目的としていた。山羊の乳は濃く、薄めて飲むか、血と混ぜて飲まれたが、羊の乳は用いられなかった。²⁶⁾

山羊にはもう1つ大切な用途がある。病人が重態になると、山羊を屠って胃を内容物ごと煮、そのスープを患者に飲ませる。山羊は羊や牛とは異り、殆んどどんな毒草でも食べる。それ故、超人的な力に訴えないで病人を治療する場合にも、また超人的な力に訴えて病を癒した患者の養生のためにも、各家庭が山羊をもっていて屠る必要がある²⁷⁾。キマナガンの山羊は、牛の場合（規則14）とは異り、こうした機会には預託者に無断で屠殺し、後に預託者に報告して弁済することが合法的に認められていた。²⁸⁾

山羊／羊は、腸占いに多用されるし、新築した家は、まず山羊／羊が地面を踏みならし、床が山羊／羊の糞におおわれることによって祝福されないと、住み始めることができなかった（Peristiany, 1939 : 158、Komma, 1981 : 106-107）。この儀礼的行為のために暫くの間山羊／羊の群を貸借するのもキマナガンであった。²⁹⁾

また、囲い込みが拡大し、共同体的な牛のキャンプがすたれ、戦士の牛牧者の護衛としての機能が失われてしまうまでは、幼い子供や娘達が出羊／羊を近隣集団近くの草原で放牧したのであり、このような性と年齢による住み分けと分業が行われる体制のもとでは、子供や娘の労働力を活用するうえで、山羊／羊が独自の存在理由を持っていたことも見落してはならない。

3. キマナガン契約の動機と目的

私は既にキプシギスのこの家畜貸借制度を表裏二面から呼ぶキマナガンとキマナクタの2つの名称があり、そのどちらも広く用いられているのに、ペリスティアニを初めとする研究者達がキマナガン（家畜の借り受け）という語にしか言及していないことに注意を喚起しておいた。³⁰⁾さらに、前節で見たように山羊／羊という小さな家畜もキマナガン＝キマナクタの対象として重要であった事実からしても³¹⁾改めてペリスティアニの用語法と彼のこの制度の性格規定そのものに疑問が湧く。彼は、先に引用した通り、この制度を疫病や敵の略奪に対する危険分散をはかる制度と規定している。だが、それがキマナガン契約を結ぶ直接の動機となるのであれば、牛の所有者が自らすすんで最もふさわしい預け先を探すはずである。ところが、ペリスティアニ自身の記述から、実際には人々の間には牛を他人に預託することに必ずしも気乗りしない空気があることが窺われる。

キプシギスが仔牛を自分のものとして保持しておきたいと考えれば、その仔牛をキマナガン契約で貰うけたいという人々に煩わさ

れることのないように、キプセル（*kipuser*）〔sic.〕³²⁾と呼ばれる傷をわざとその仔牛の鼻面に付ける。この傷は母牛から乳を飲めないようにするものだが、それは与えられるべきキマナガン³³⁾がないことの印なのだ（Peristiany, 1939 : 151）。

私の、推定年齢80才以上のインフォマント達は、異口同音に、キマナガン制度は子供に与えるべき食糧（乳、血）を確保するために親族、姻族、友人、知人に家畜の貸与を乞うものであったと語っている。ペリスティアニは、先の引用に続けて次のように述べている。

多くの牛をもち、容易にキマナガンを断らない人物は大いに尊敬を集める。彼は *neo* ³⁴⁾つまりビッグなのである。ところが、牛を手離しながらない人物はキプムオケット（*kip-muoket*）³⁵⁾即ちけちでいやな野郎と呼ばれる。

この記述は、むしろ個人感情としては牛をキマナカイとして手放したくないが、たとえ自分のお気にいりの（体色などの）仔牛であっても乞われたら、個人的な感情を殺しても、手放すのが社会の要請であり倫理であることを物語っていると考えられる。

ハンティングフォードは、キプシギスのキマナガン制度とナンディの *カプティッチ*（*kaptich*）制度は目的も運営形態も極めてよく似ているという（Huntingford, 1969 : 41）。だが彼は、ペリスティアニのこの部分の記述を受けて、キプシギスでは受託予定者がわざわざキマナガンを依頼するためにまえて訪れる一方、お気にいりの仔牛を手放したくない者が故意にその仔牛の鼻面に傷を付けてその意志を告知することを挙げ、「キプシギスの間では、牛を他人に預託することがナンディの場合よりもずっと社会的に避け難いものになっているようだ」（同上）と述べている。また、預託者側に余程の理由がない限りキマナガン契約で預けた牛が取り戻せないというのもナンディの *カプ*

ティッチ制度とは異ると、すぐに続けて述べている。

ハンティングフォードは、ペリスティアニのモノグラフに依拠して、キプシギスのキマナガン制度は「牛群を病気と略奪から守る」というナンディのカップティッチ制度と「同じ目的」を持つとしながらも、上の2つの事実を鑑ると、キプシギスのキマナガン制度では果してそれが第一義的な動機だろうかと暗に疑問を呈していると受けとれよう。

私の老インフォマン達は、キマナガンの申し込みが、ずっと以前には往々断られることがあり、そんな場合にはかなりの量のシコクビエの穀粒を手土産に持参して再度説得に当たったと語った。

ペリスティアニは、キプシギスがキマナガン制度を通して、「信頼のおける友人を得、自分の家から極めて遠い所に住んでいる人々の間に名声を博する」(Peristiany, 1939: 150)と書いているが、これは先に述べた規則2-a, 11, 11-a, 13などを勘案すれば、必ずしも事実と思えない。即ち、キマナガン契約は本人同志の個人間の秘密として、できる限り内密にされることが要請されていた。だから、威信を得ることがキマナガン契約を結ぶ動機であるとみること、家畜を貸し出すことによって結果として威信が高まったとも、少なくとも初期の制度下では考えにくいのである。事実、むしろ逆であろう。威信を高めるには、1頭でも多くの牛を確保して、自分の牛群を常に大きく脹らましておく必要があったのだ。ペリスティアニ自身の記述に窺えるキマナガン契約による牛の貸与への消極的・否定的な姿勢もこの文脈から読み解かれるべきである。

威信に関していえば、他方、キマナガン契約の申し込みを受けた者が故無くそれを断れば確実に彼の名はすたれた。それに、キマナガン契約は、むしろ既に何かある程度の個人的な関係のある人々の間で行われるのであり、個人間の友情を強化する契機とはなったが、その締結自体が必ずしも友人関係を形成する端緒ではなかつ

た。キマナガン契約の締結を求める積極的な動機をもつのは預託者でなく受託者である方が一般的であり、預託者はむしろ反社会的存在となりたくないという消極的な動機からキマナガン契約に同意したことをここで確認しておく必要がある。

要約すれば、19世紀末から20世紀初頭におけるキマナガンは、一義的には——経済的な面に局限した意味においてでなく、牛をあらゆる価値の核とするキプシギスの「牛複合」文化の価値観に立った——相互福祉を目的とするものであり、危険分散の側面は大いに重要なが、この制度の副次的機能——社会学の用語を用いれば半潜在的順機能——であったと評定するべきであろう。

シコクビエの穀粒を持参してキマナガン契約の締結を依頼する事実には、受託者と預託者の間の上下関係が表われている。しかし、ペリスティアニはいう。「仔牛をキマナガンに出した人物は、今度は(その受託者とは)別の友人にキマナガンを依頼するだろう。こうして、彼の牛囲いの牛は……ほぼ同じ大きさになる」(1939: 150-151)。その通りである。注意しておきたいのは、キマナガン制度が社会の階層化を前提としてもいなければ、それを生じさせる契機ともならないことである。

牛は単に経済的価値を持っていただけではない。牛群の大きさは威信と感情的な満足の源泉である。各人は自分の牛群の規模の維持と拡大とを常に希求している。だから、貧者であれ、富者であれ、キマナガン契約によって他人から牛を努めて預かろうとすることは、キプシギスにとっては当然のことと考えられていた。もしキマナガン制度が純粋に経済的な見地から実施され、貧乏人が豊かな者に一方的に援助を求めるシステムになっていけば、論理的にいても、以上の条件下ではペリスティアニが先に指摘したことは起りえない。豊かな者が自家に保有している牛の数は、彼が各所に所有する仔牛の全数よりかなり小さいものにならざるを得ないからである。

実際、豊かな者でも——極端に貧しい者は別にして——それ程生計に余裕ない者に対しても牛の貸し出しを依頼することができた。こうして各人の預託と受託、上位性と下位性がキマナガン契約の複雑なネットワークの広大な広がりの中で中和されることになる。私の老インフォマント達も、「牛を沢山持っているから牛を貸し出すのではない」と明言している。このように、極めて平等で個人主義的なキプシギス社会の存続にキマナガン制度が資していたのである。

4. キマナガンの語義とペリスティアニの概念規定との矛盾

ペリスティアニ以外の研究者がキマナガン＝キマナクタ制度をどのような用語で記述し、どのようにこの制度の性格を規定しているかを概観してみよう。

キプシギス人であるトウェットは、この制度の名称には触れず、彼の著書の「友人の囲いの中の家畜」という項で、「かつて人々は喜んで他人の家畜を飼養した。キプシギスは牛の病気を恐れ、全ての牛を同一の囲いに飼っておく——卵を一つの籠の中に入れておく——という考え方を好まなかった」(Towett, 1978: 58)³⁶⁾と書いている。³⁷⁾

マナーズは *kimanagen* (sic.) または *kimanaktaet* (sic.) の用語を用い、³⁸⁾「保護を求めて、友人、同年齢組成員、あるいは同氏族成員に牛を貸し出すこと」と性格規定し(KK: 233-234, Manners, 1962: 494)、³⁹⁾トウェットと全く同じ卵の比喩を用いている(KK: 234)。

ソールトマンは、キマナガン(*kimanagan*)とこの制度を記述し、それは「友人、親族……、姻族それに同年齢組成員に……牛を貸し出す制度」(Saltman, 1979: 31)であるとする。

因みに、他のカレンジン語系諸族の、キマナガンによく似た制度も眺めておこう。ナンディについてのハンティングフォードの見解は既に述べた。⁴⁰⁾エルゴン山のウガンダ側に住むセベイについて、ゴールドシュミットはカマナカン

(*kamanakan*)の語を用いるが、「所有者以外の人物によって牛が所有され飼養される契約的取決め」(Goldschmidt, 1967: 266, 1976: 374)と中立的に内容を規定している。彼は、これに加えて、貸借される牛そのものについてはカマナカネット(*kamanakanet*)あるいはカマナカニック(*kamanakanik*)、即ち「所有者によってローンとしてある人物(自分)の囲いの中に置かれた牛または他の家畜」(同上)と、カマナクタイ(*kamanaktai*)、即ち「ローンとして誰かの囲いの中に置いてある牛または他の家畜」(同上)というベクトルが相反する2つの概念をきちんと紹介している。ゴールドシュミットは、キマナカンを、(a)牧夫としてのサービス、と(b)牛囲いの中に牛を保有する喜び及びその牛の牛乳の利用、との交換を骨子とする契約と考える。彼はまた、土地不足という今日的状況では、この契約締結の動機は牛の分散あるいは自家での牧草不足の解決であるとする(Goldschmidt, 1967: 207)。⁴¹⁾

セベイでは、この制度そのものはカマナカンと呼ばれ、貸し出された牛がカマナクタイ、借りられた牛がカマナカネットまたはカマナカニック⁴²⁾である。他方キプシギスでは、貸し出すことがキマナクタであり、借り受けることがキマナガンである。

この事実は、カレンジン語系諸民族の牛の貸借制度の用語体系では、牛の移動のベクトルがはっきりと意識されていることを示していよう。牛は貸し出されるばかりでも借り入れるばかりでもなく、借り入れると共に貸し出される「やったりとったり」の互酬の媒体であると考えられているからである。ペリスティアニのようにキプシギスの牛の貸借制度をキマナガンと呼べば、この制度の受託の側面に限られることになる。もし彼がこの制度を牛の預託制度と考えるならば、むしろ——語義に忠実に——キマナクタと呼ぶべきだったろう。勿論、プレスクリプティブではなくディスクリプティブなアプローチをとるうえでは、キマナクタ＝キマナガンの用語を採用するのが最も妥当だったといえる。

では、キプシギス研究者が——マナーズだけはキマナゲンと誤用しているが——等しくキマナガンの語でこの制度を記述し、本来の語義のベクトルとは全く逆に、この制度を牛を分散させることを目的または動機とする牛の貸与制度と規定してしまったのは何故だろうか。1つには、先駆者であるペリスティニアニの規定を先入観として持っており、この用語をそのまま無批判的に受け入れてしまったからではないだろうか。⁴³⁾もう1つ考えられることは、マナーズやソールトマンが調査を実施した時点では、牛を貸し出すことを動機としてキマナクタ＝キマナガン契約が作動することが一般的な状況にあったのではないかということである。また彼等が牛だけに言及し、山羊／羊に殆んど関心を払わないのは、経済状況にも既に大きな変化が生じ、山羊／羊が経済的重要性を失っていたからではあるまいか。

5. ナンディの1940年代のカップティッチ制度

ペリスティニアニ自身がキマナガン契約の実際の事例を紹介してくれていないので、この制度がヨーロッパ人との接触の初期にどのように運用されていたかを、実態に即して仔細に検討することはできない。また時代が下っても、他のキプシギス研究者によるキマナガン契約の事例報告は1例もない。しかし、この制度の歴史的な背景を窺ううえでも、また後に記述する私自身が収集した時代の諸事例を検討するうえでも、その中間の時代の状況を知っておきたい。

そこで、方便として、ハンティングフォードが記録しているナンディのカップティッチ制度についてのかなり詳しい唯一の事例報告(Huntingford, 1950: 38-56)に当たってみたい。これはあくまでも次善の策に違いない。だが英国によるケニアのいわゆるホワイト・ハイランド植民地化の進行という時代の大状況の中で、昔も今もあらゆる次元でキプシギスとの同質性の著しいナンディという民族の有するキマナガン制度に極めて類似するとみなされているカップ

ティッチ制度が実際にどのように作動していたかを検討することは、我々がキプシギスのキマナガン制度の歴史的変化を考究するうえで少なからぬ示唆を与えてくれるものと期待される。

当時——即ち、恐らく1940年代後半と推定される——ナンディの成人男子は1人当たり20～50頭の牛を保有していた。セトルメント(白人入植地)にスクウォッターとして住むマイナ年齢組⁴⁴⁾のキプチュンバは25頭の牛を所有していた。ところが、植民地政府がウアシンギシュ・ディストリクトの各スクウォッターが保有する牛の頭数を10頭に削減する命令を出した。この措置には牛の盗難の発生件数を抑えようというネライもあった。

当時、キプチュンバの母方のオジの息子でニュンギ年齢組⁴⁵⁾に属するキメンジョは、リザーブ(現地民保留地区)に住んでおり、(リザーブは過放牧のため表土流出がひどいため)牧草の豊富な土地(即ち、入植地のスクウォッターの所)へ自分の牛を移したいと考えてキプチュンバの援助を求めた。

キプチュンバは、彼の「ママ」⁴⁶⁾であり、上位年齢組員でもあるキメンジョに便宜をはかるために、方々に住むB、C、Dの3人がキプチュンバの牛をそれぞれ6頭、6頭、8頭引きとって預かるように取り決めた。同時にキプチュンバ自身はキメンジョの5頭の牛を引き取った。

一方、キプチュンバの姉妹の夫キビルケンは、(恐らくリザーブに住んでおり)自分の牛群を分割するべく、牛の受け入れをキプチュンバに求めてきた。だがスクウォッターが保有できる牛の頭数が10頭に制限されてしまったのでキビルケンの求めに応じられなくなり、キプチュンバは、キメンジョがキビルケンの牛を12頭預り、——居住地が示されていない——別人Aが同じくキビルケンの牛を5頭預かるように取り計らった(Huntingford, 1950: 52-53)。

ここに描き出されているのは、1つの大きな過渡期におけるナンディのカップティッチ制度の実態である。1940年代にはナンディのリザーブでは過放牧と表土流出が進行していたので、

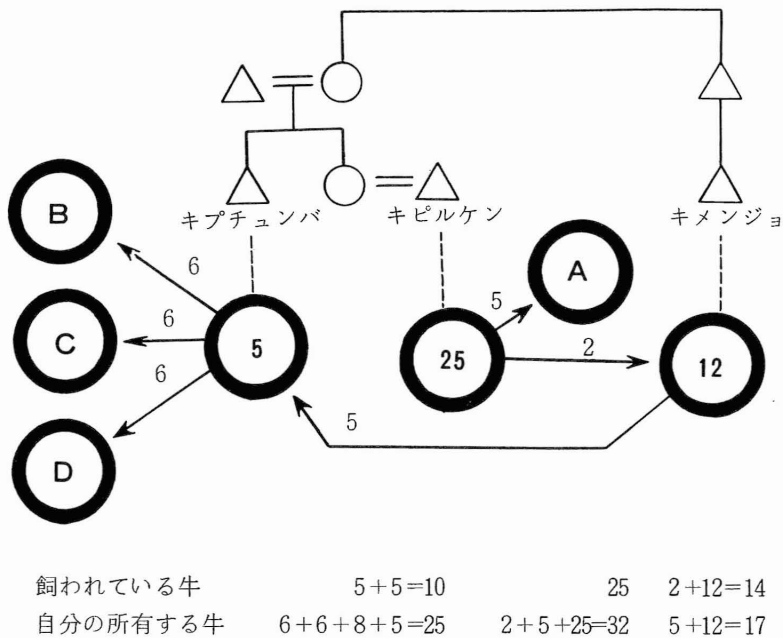


図1 カップティッチ制度による牛の配置の実例

(Huntingford, 1950:53)⁴⁹⁾

この状況を緩和しようと、リザーブの人々がヨーロッパ人入植地にスクウォッターとして住んでいる知人の所へ牛を預託することが盛んに行われていた。ところが1940年代のある年に植民地政府がスクウォッターの保有できる牛の数を制限したために、その年を境にカップティッチ制度による牛の預託の方向の大勢が逆転し始めたことを以上の事例から読み取ることができる。だがこの年以前も以後も、少くとも1940年代には、ナンディのカップティッチ制度は——動機が危険分散であるにしろ、牧草の確保であるにしろ——他人から牛を借り受けるよりもむしろ他人に牛を預託することが積極的な目的であったことは明らかである。

さらに、スクウォッターの牛の保有制限によって、カップティッチ制度を通じてリザーブのナンディが白人入植地の豊かな牧草を利用できるというカップティッチ契約の重大な動機を奪わ

れてしまったにもかかわらず、この措置がカップティッチ制度を衰退させることになるどころか、これを契機に同制度が一層複雑で肌理細かなシステムに発展しつつあったように見える。

ハンティングフォードは、カップティッチ制度が牛という紐帯によってナンディという民族の全成員の間に極めて強固な連繫を形作るとして、この結びつきを下のように図示している。⁴⁸⁾

ハンティングフォードは、ナンディのカップティッチ制度の本質が「互酬性」にあるとみなし、「何時何とき他人の好意にすがらなくてはなくなるか誰にも判らないのだから、当事者各人の牛の出入りが均衡する限り、各人は他人のためにできる限りのことをしようとするのが普通である」という(1950:53)。この事例でも、「キブチュンバは、自分の(25頭の牛のうち)20頭を他人の手に委ねてしまったが、まだ10頭の牛を手許にもっていて、その牛が牛乳

を与えてくれるばかりでなく、彼が牛の保有者であるという目に見える具体的な印を与えてくれるのである」(同上)。

スクウォッターとして白人入植地に住むキプチュンバは、リザーブの人々の牛を受け入れられる客観的条件が失われたにもかかわらず、キメンジョの牛を5頭(即ち保有可能枠の半分に当たる頭数)も預り、自分の所有する牛25頭のうち20頭を、B、C、Dの3人に預託した。ハンティングフォードのようにカップティッチ制度の本質を互酬的な扶助と考えれば、キプチュンバが大きな犠牲を払ってまでも進んでキメンジョに便宜をはかってやったのは、むしろリザーブの人々の牛を受け入れられる有利な条件が失われた——にもかかわらずではなく——からこそであったともいえるだろう。

恐らくそれがスクウォッター化の最大のインセンティブであった、入植地で牛を自由に放牧

して構わないというスクウォッターの特典が失われた時、彼は時代状況が自分達にとって不利な方向へ急速に変化しつつあることを感じとっていたであろう。そこで、いざという場合に備えて、カップティッチ制度を活用して、人的関係資源を強化しておく必要を認めていたと思われる。彼にとって条件が急速に悪化したからといって、カップティッチ契約を放棄したり縮小したりすることはむしろ自殺行為に等しかったといえる。

このようにスクウォッターの保有できる牛の頭数が強く制限されたことが、入植地の「無限の放牧地」という従来の大きなインセンティブを奪い取ったにもかかわらず、むしろナンディの牛牧社会におけるカップティッチ制度の恒常的機能を再確認させ、カップティッチ制度を強化し、内的に発展させる作用を果したといえるのである。

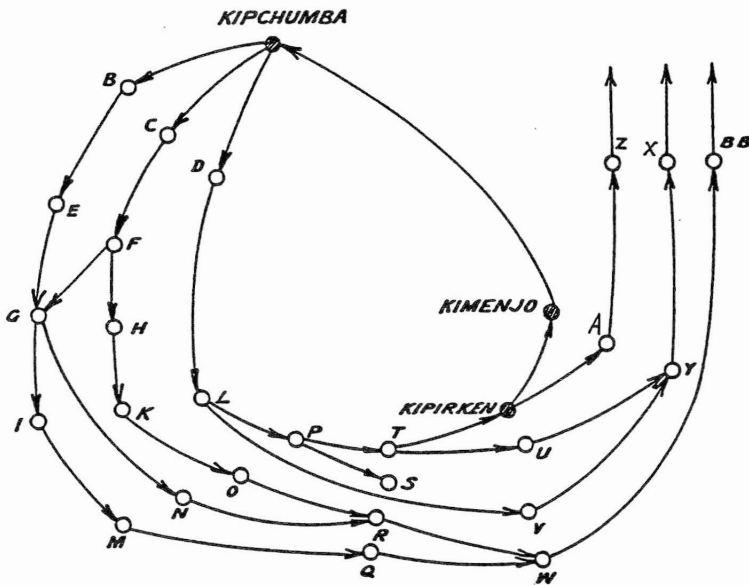


図2 カップティッチ制度による人々の結び付き
(Huntingford, 1950:54)

6. キプシギスの伝統的な土地保有制度と伝統的なキマナガン制度

1940年代におけるナンディのカップティッチ制度の具体的な事例から、その変化の主要な要因が、第1にはヨーロッパ人の入植による土地保有制度の劇的な変化であり、次いでナンディ人スクウォッターの放牧権に対する植民地政府の政策の変化であることが判った。

では、キプシギスランドでは、植民地化に伴って土地の保有制度にどのような変化が生じ、その変化がキプシギスの牧畜の形態とキマナガン制度とにどのような影響を与えたのであろうか。

ペリスティアニの調査した1937年頃のキプシギスランド北部のベルグート地方北部では、土地はふんだんにあったようである。彼が初めて目にしたキプシギスランドは、「画趣に富む」かも知れないが、「人跡の絶えた侘びしい」景観を呈していた。「何マイルも何マイルも藪か草地が続き、次に黒ずんだ一区画（つまり畑）、それから一軒の小屋と穀物倉、そして時には牛囲いが現われる。それからまた藪になり、300～400ヤード行ってから漸く別人の住んでいる兆候に出会う」（Peristiany, 1939: 126）。

この光景は、すぐ前節で見た1940年代後半のナンディの景観とは余程異ったものであろう。ペリスティアニの調査当時には既にトウモロコシがキビにとって代り、伝統的な主食穀物であるシコクビエと同じ位の作付面積で栽培されていた。トウモロコシ畑の犁耕も既に行われていたけれども、シコクビエの焼畑方式による移動耕作や家畜の放牧を続けてゆくのに十分な土地があったようである（同上：126-140）。

キマナガン制度の変化の主要な原因であったヨーロッパ人入植後の土地保有制度の変遷を辿る前に、まずキプシギスの伝統的な土地の保有形態に言及しておく必要がある。

ヨーロッパ人と接触する以前には、キプシギスランドの藪や森林の所々に近隣集団が点在していた。だが、近隣集団の境界は地理的な要因ではなくあくまでもコミュニケーションの容易さを基礎として社会的に決定されていたので、

目に見える景観は、ペリスティアニが記述した通り、藪の所々に家と放牧場と畑が散らばるパターンの無限とも思える繰り返しに過ぎなかった。

近隣集団成員は、様々な地域の出身で、様々な氏族や年齢集団や軍団に属しており、他方氏族や年齢集団や軍団が固有の領土を持つことは全くなかった。⁴⁹⁾ 必要があれば、近隣集団がその年の耕作地の割り当てを調整することはあったにしても、おおむね土地の利用は各家々の裁量に任されていた。畑の規模も自由であったが、純粋な自給農業という性格から、その大きさは家族員数と自家の労働量によってほぼ自動的に決った。各家々は近隣集団が占める領域内に点在し、家に接して極く小さな菜園が作られた。菜園は家畜や野生動物による食害を防ぐために柵で囲われ、半野生の粗末な野菜が粗放な仕方で作られた。主食であるシコクビエの畑は、せいぜい1エーカー位の広さで、普通は家のある丘の斜面に沿って作られることが好まれ、頂近くから麓に向かって一条の帯のように配置されていた。だが1年間耕作した後、畑は翌年には放棄された。というのは前年耕作した土地はその耕作者が優先的に利用できるが、シコクビエやキビは2年連作すると収穫量がひどく低下するからである。そこで、数年も経つと、畑は家からかなり離れてしまい、他の家のものと入り乱れるようになる。野菜、シコクビエ、キビの畑の周囲に大雑把な柵を作って獣の侵入を防ぐのは耕作者に課せられた義務であった。

キャンプのある放牧場は近隣集団のかなり（15～20キロメートル）遠方にあるのが常であり、より広範囲の人々、理念的には民族の全成員に開かれており、その利用は近隣集団の規制するところではなかった。ある近隣集団の戦士達が牛を飼養する放牧地は、かなり頻繁に移動した。放牧場の移動に比べるとずっと長い周期ではあるが、近隣組織も順次位置を変えていった。このシステムは植民地化によってキプシギスランドが入植地と保留地とに分けられ、他方それと同時にトウモロコシ栽培の拡大と防疫の

普及によって人口と畑地及び家畜数が増大した結果としてその運用が不可能となるまで保持された。

菜園や穀物畑の用益権は、耕作が行われている期間その耕作者に認められるだけのものであり、シコクビエやキビの畑は上記の実際的な理由から耕作1年後に放棄されて次々と別の所へ移されたので、土地私有の観念はもとより、——宅地を除いて——同一家族による同一区画の半永続的な保有という観念も存在していなかったし、土地相続という観念も存在しなかった。

このような土地保有形態にあり、且1戸当りの家畜保有数が小さかったと思われる（1890-1920年の）時期には、キマナガン契約締結の主要な動機は最も好まれる重要な食糧としての牛乳と血の確保であり、受託予定者が契約の締結を預託者に働きかけていた。この条件下では、危険分散を第1義的な動機として預託者からキマナガン契約を求めることはかなり考えにくく、危険分散はこの制度の副次的な機能に留まったであろう。これが前節で導いた仮説である。

Ⅲ ヨーロッパ人入植以降の土地保有制度の変化とキマナガン制度への影響

ヨーロッパ人の入植が、キプシギスの伝統的な土地保有制度と彼等の経済生活に、またその結果として「牛複合」文化における牛の伝統的な価値にどのような変化をもたらしたのであるうか。ナンディのカップティッチ制度の事例から窺えたように、その変化を歴史的に辿ることがキマナガン制度そのものの変化を検討するうえでも最も重要な作業になると予測される。

キプシギスの土地保有制度と経済の歴史的変化については、マナーズが、ディストリクト・コミッションナーの年次報告書を初めとする文献調査を軸に、かなり詳細に研究している。主旨も記述内容もほぼ重なり合う彼の3つの論文の複雑に錯綜する議論を丹念に追いながら、以下にこの歴史的変化を便宜的な時代区分を立てて編年的に概観してみよう。

1. ヨーロッパ人との最初の接触から第1次世界大戦まで

まず彼の1967年の論文に従って、キプシギスとヨーロッパ人との最初の接触から第1次世界大戦までの変化を追おう（KK：273-299）。

1901年に完成したモンバサ＝キスム鉄道の建設過程で両者が初めて本格的に接触するようになる。だが本当のインパクトは、ヨーロッパ人のキプシギスランドへの入植によってもたらされた。

キプシギスランドに最初のヨーロッパ入植者がやって来たのは1906年から1907年頃である。ヨーロッパ人のキプシギスランドへの入植は、ケニアの「ホワイト・ハイランド」の他民族の土地への入植と軌を一にするものであるが、前者には特筆すべき特徴がある。まず、ケニアの全民族の中で最も大きな割合で領土を譲渡させられたこと、次に前章で見た通りキプシギスが集落を作らず全領土に点々と散居していたために、その譲渡させられた土地全域が単なる移動放牧地や無人の荒野ではなく、実際にキプシギスが日常生活を営んでいる土地だったことである。キプシギスは、領土の最も豊かな部分を取りあげられた。それは現在のケリチョの街の北及び東に広がる一帯と、現在のソティックの街の西及び南に広がる一帯とである。当時、後者は西ソティックと呼ばれた。キプシギスにはこの両者の中間に位置する地域が保留地として残された。

ヨーロッパ人が入植した2つの地域では、土地の譲渡に当って、キプシギスの取り扱いについて異った政策が取られた。北部地域では、キプシギスが立ち退くかそれともヨーロッパ人入植地に「合法的スクウォッター」として居残り、従来通りに放牧と耕作を続けるか随意に選択することができた。一方、西ソティックでは人口密度がかなり高く、土地の収容が思うにまかせなかったもので、1908年から1909年頃に一旦全住民を強制的に立ち退かせた。潔く立ち退きに応じなかった者の小屋は焼き打ちにあい、彼等も仕方なく、入植地と保留地の境界となったキプソ

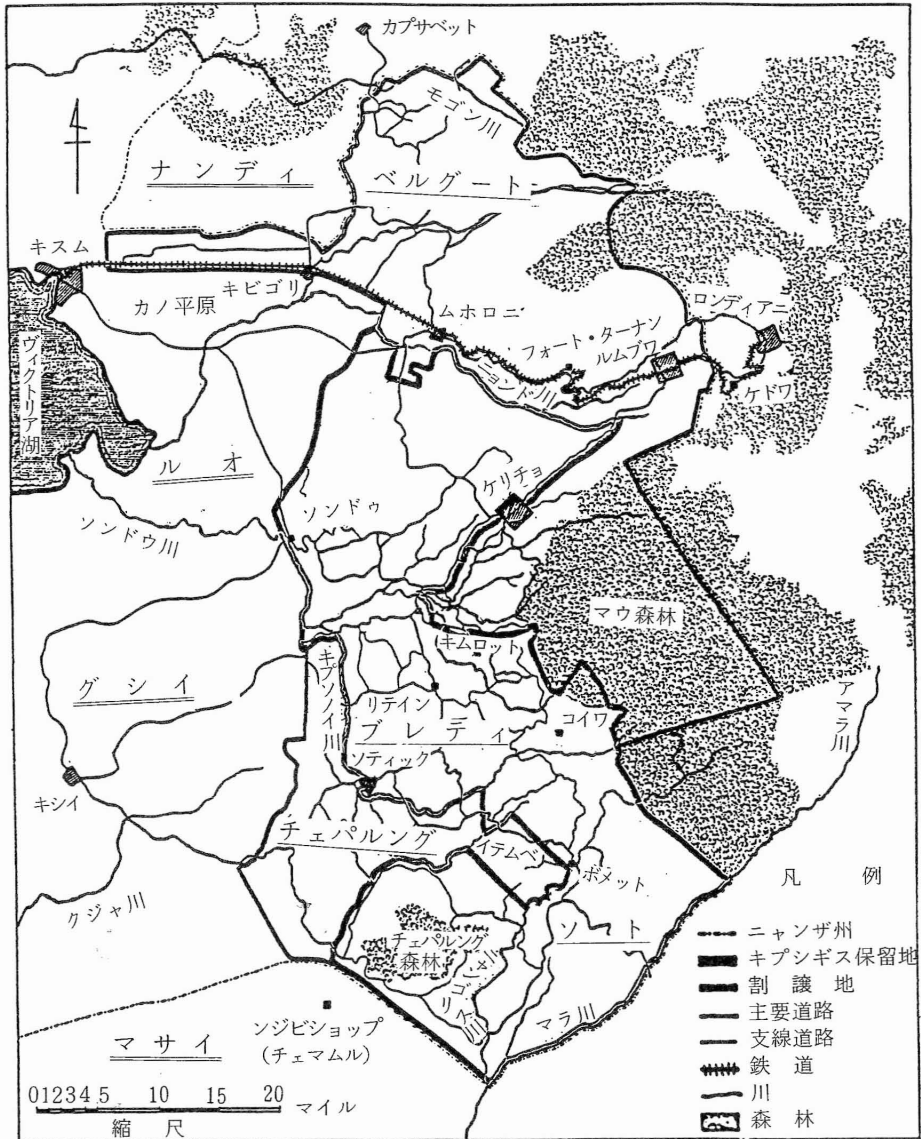


図3 1967年当時のケリチョ・ディストリクトの概況
(Manners, 1967:278)

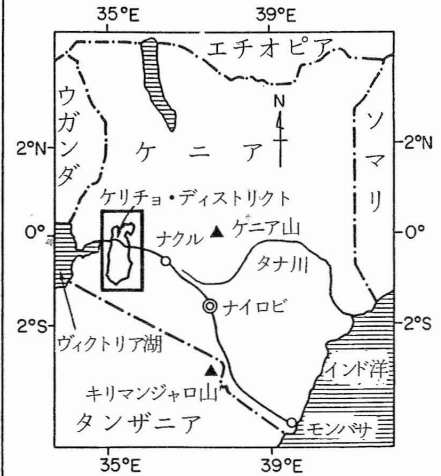
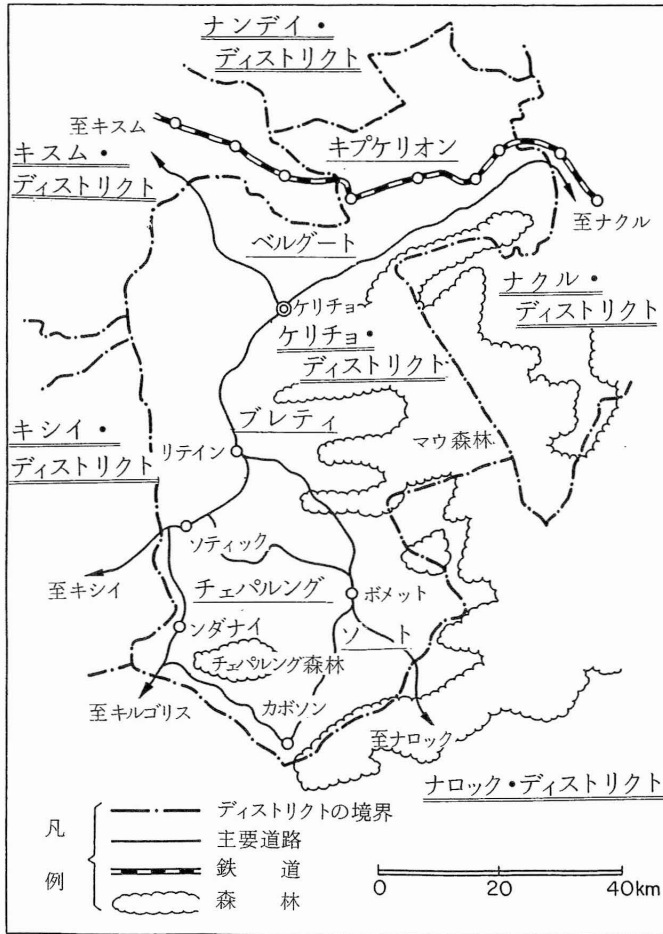


図4 現在のケリチョ・ディストリクトの概略

ノイ川を渡りその東側に設定された保留地へと移って行った。西ソティックへ実際にヨーロッパ人が入植する1912年頃まで、このように強圧的に収容された土地も手つかずのまま放置され、荒れるにまかされていた。このキプシギスの強制立ち退きは、将来のヨーロッパ人入植者がキプシギスと自由にスクウォッター契約を結び、必要な労働力に見合うだけのキプシギスを再び呼び戻すための便宜を与えるために行われたものである。

ヨーロッパ人入植者に対して、ケリチョ北部地域では1戸当り500～5,000エーカーが、西ソティックでは5,000エーカーが自由保有地または99～999年間の借地として、いずれも唯同然の対価で与えられた。入植者は各人がキプシギスと自由勝手なスクウォッター契約を結び、いわば「入植者の言葉が法律」だった。一般にキプシギスの「合法的スクウォッター」、あるいは「永年スクウォッター住民」——後には曖昧に「住民労働者」——は、年間70日以上の有

給労働をする義務を、スクウォッター権と交換に課された。このほか、放牧料は牛20頭以上なら日に2ポイント、牛20頭未満であれば1ポイントの牛乳で支払われた。西ソティックでは、最初は保留地に住む非スクウォッター住民がヨーロッパ人入植地内で放牧することも認め、同様の放牧料を徴収した。

家畜の放牧頭数は、最初の間制限されないのが普通だったが、中には牛をスクウォッター1人当たり30～40頭に制限するヨーロッパ人入植者もあった——但し、山羊／羊の頭数については制限がなかった。

ケリチョの北部では、ヨーロッパ入植地内にスクウォッターとして居残ることを潔しとしなかった者は、友人、親族、氏族、同年齢組成員などのつてを頼って移住し、その近隣組織に吸収された。西ソティックのある者は、遠く南に行き、マサイの放牧地である現在のナロック・ディストリクトのキルゴリスの辺りへ移住した。

ヨーロッパ人入植者達は、必要な労働力を安定して確保できるかどうか不明だったので、最初の数年間は在来種の牛の飼養に専念した。労働力も大していらず、付帯設備も殆んど必要としなかったからである。この時期は、ヨーロッパ人入植者が、極小の労働力で達成できる経済活動に限定された時代と特徴づけることができる。

だが、やがて人頭税や小屋税の導入、とくにその金納化が、ヨーロッパ人入植者達の労働集約的な企てを可能にする。最初の間は税金は山羊／羊で支払うこともできたし、かわりに労働力を提供することも認められた。だが、まもなく税の金納が義務づけられる。そして、小屋税が人頭税に変わり、税金の徴収は一層徹底化された。

ここで一旦マナーズの論文を離れて、納税制度の導入過程をキブシギス側の「歴史」から、もう少し丹念に追ってみよう。

キブシギスの7つの年齢組はそれぞれ固有の名称をもち、循環して現われるが、ナンディとは異なり、キブシギスでは各年齢組を構成する

下位単位であり、同年にイニシエイトされた者達の集団である各々の小組には循環して現われる固有の名称が無く、その小組には彼等が隔離期間などに経験した歴史的イベントを記念する一度限りの「讃え名」(*kachaet*)がつけられる。現存するニョンギ年齢組の小组のうち3つの小组の「讃え名」に納税制の導入とその変化を示す名称がつけられている。

最初に税金(*korti*)⁵⁰⁾が課された時にまだ隔離小屋にいた小组は、キプティルバルワ(*Kip-tilbarwa*)と名付けられた。キプティルバルワとは、「領収書を切った者」の意味である。⁵¹⁾この小组の名前が、不幸にして、どの文献にも記録されていないので、税金の徴収が始められた年を正確に推定することは難しい。

次に、キプスィルゴット(*Kipsirgot*)小组は、まだ幾つかの隔離小屋に成員が残っている時に徴税吏が小屋税の取り立てに来て、初めて小屋の数を数えあげ、戸主の名前を記録したことに因む名称である。直訳すれば「小屋を書く(飾る)者」だが、⁵²⁾この名はバートン(*Barton*, 1923: 60)もドップス(*Dobbs*, 1921)も記録しており(*Huntingford*, 1969: 49)、1911年に開かれた小组であることが判っている。当時イニシエーションの隔離期間が2～3年であったことを考えると、徴税吏が初めてキブシギスの戸数を数えあげ、各戸主の名前を記録したのは1912～1913年であったと推定される。

第3はブルー(*Bulu*)小组だ。*Bulu*の名は、英語の *blue* から出ている。この小组が開かれた年に初めて人頭税が導入され、納入した者の指にブルー・スタンプが押されたからである。バートン(*Barton*, 1923)もドップス(*Dobbs*, 1921)も *Buloo* と記録し(*Huntingford*, 1969: 49)、1916年にこの組が開かれたことが判っている。⁵³⁾

いずれにせよ、1910年頃からキブシギスへの課税が始まり、第1次世界大戦の開戦直前に人頭税制として確立したことが窺える。

因みに、この時期には、伝統的に無頭的で非中央集権的な政治構造を持っていたキブシギス

の間に、行政首長とヘッドマンとが導入された。この新しい役職に就いたのはむしろ「取るに足りない」人々であった（小馬、1984）。一部のキプシギスは彼等の「不当な」干渉を嫌い、彼等から逃れるために、逆説的だがヨーロッパ人入植地に移って「合法的スクウォッター」となる道を選んだ。

再びマナーズの論文へ立ち戻ろう。納税制度の確立は、ヨーロッパ人入植者がキプシギスから安定した労働力の供給を確保できるようになったという点で、キプシギスの極めて大きな社会変化の引き金となった。

ヨーロッパ人との接触が始まった当初、肉体労働をひどく蔑んで、道路工事などの徴用に頑に抵抗したキプシギスだったが、税制導入当時は家畜が唯一の備蓄でもあったので、山羊／羊を売り払うよりも賃労働に従事して、それで得た賃金収入をもって税金に充当することを彼等が選ぶようになったのである。だが、ケリチョの北部や東部のヨーロッパ人入植地では、スクウォッター化を嫌ってキプシギスが大量に土地を離れたので、労働力の確保のためにキクユ人などを雇い入れている。

ヨーロッパ人がキプシギスランドに入植を開始した直後から、植民地政府はキプシギスにトウモロコシの栽培を強く奨励する。しかし、キプシギスの最初の反応は否定的なものだった。ヨーロッパ人の搾取に対する不信、入植者に敵対する——社会の中心に位置するマサイのライボン型の予言者である——オルコイヨットによる妨害、加工法や調理法についての無理解に由来する不幸な事故の発生などがその要因であった（Peristiany, 1939 : 290）。とはいえ、「当初の抵抗とライボンの（妨害）努力にもかかわらず、次第に多くのキプシギスが換金と自給の二重の目的性をもつ（トウモロコシという）作物の栽培に着手するには5～6年もあれば十分だった」（LU : 501）。⁵⁴⁾ こうして栽培されたトウモロコシをインド人商人が買い集めた（Manners, 1964 : 271）。⁵⁵⁾

植民地政府がキプシギスにトウモロコシ栽培

を強力に奨励したのは、キプシギスをトウモロコシを換金用に作る比較的生活の安定した小農に変え、それによってヨーロッパ人入植者の農園の労働力も同時に確保するという見通しからではなかった。1907年当時、キプシギスの労働力を緊急に大量に必要とする状況は、先に見た通り、まだ存在しなかった。むしろ、機構の整備、拡大と共に増え続ける行政官や兵士、警察官や、商業活動の拡大によって成長する商業センターや街の人口、それにヨーロッパ人入植者の農園で働く（キクユ人などの）労働者にトウモロコシを供給できる手近かな産地作りが狙いであった。

マナーズは、第1次世界大戦以前にもホワイト・ハイランドでは、多くの人口が自給農業を離れて白人の農園やエステートで働くようになっていたので、トウモロコシの市場が成長を続けていたという（LU : 501）。だが、このトウモロコシ市場の拡大がキプシギスの経済生活に与えた影響はかなり限られたものであり、この時期にはキプシギスにおける牛の価値も、またキマナガン制度もほとんど変化を受けていなかったと考えるのが妥当であろう。

キプシギスの現金経済への適応の早さを常に強調（または誇張）してやまないマナーズも次のように留保を加えている（CNLT : 270）。

ヨーロッパ人が到来し、キプシギスの最良の土地が幾千エーカーも彼等に譲渡されたことによって、この部族がかって享受していた自由勝手な移住は大いに制限を受けた。しかし、彼等の居住形態及びホームステッドと放牧地に分離する方式は、ほんの取るに足りない変化はあったとしても、少なくとも第1次世界大戦が終るまでずっと維持されていた。

但し、彼は次のようにも述べている。「スクウォッターは労働収入と家畜（animals）を売って得た金を小屋税（後には人头税）の支払いに充てた。現金の余剰分は牛の買い入れに用いられるのが常だった」（LU : 499）。ここでは明

言されていないが、animals とは文脈から見て山羊／羊と考えるのが妥当だろう。すると、この時期は、19世紀末に口蹄病で失われた牛群を、再建する過程で牛の代用獣として重要であった山羊／羊の価値が低落し、一方牛の価値が維持されるか、あるいは向上する過程であるといえるのではなかろうか。この状況が、やがてペリステアニィが描いたようなキマナガン契約のあり方を導いてゆくものと考えられなくもない。

2. 第1次世界大戦から1930年まで

第1次世界大戦がケニアのホワイト・ハイランドにもたらした大きな影響の1つは、1914～1918年間の亜麻布の高騰に伴う亜麻の作付け面積の拡大である。再びマナーズを、KKを中心に追ってみよう。この頃までにヨーロッパ人入植者は既に飼養する牛を在来種から混血西洋種（グレード・カウ）に切り換えていたが、第1次世界大戦後、牧畜よりもむしろ農業経営へ傾斜を強めてゆく。第1次世界大戦後、即ち1919年から、英領東アフリカ傷痍将官団（British East Africa Disabled Officers' Corps）を中心とする大量のヨーロッパ人入植者がキプシギスランドへやって来た。彼等は主としてケリチョの街の周辺に、各戸5,000 エーカーの土地を割り当てられた。ソティック⁵⁶⁾ー帯はルンブワ駅から50キロメートルも離れているので、この時期の入植者は少なかった。新規入植者達は、主に亜麻の栽培に乗り出し、この結果労働力とトウモロコシの需要が急騰する。だが、まもなく亜麻布の価格が好況時の6分の1に急落したので、多くの入植者達が破産してヨーロッパへ引きあげた。

この時期に生じ、それ以降のキプシギスランドの経済のあり方を決定づけた最も重大な変化は、茶のエステートの経営が本格化したことである。1912年には、ケリチョの近くに最初の茶園が作られたが、その規模は僅かに1.5エーカーに過ぎなかった。茶がエステート形式で本格的に栽培され始めるのは、1924年に小さな精茶工場ができてからである。だが、土地の気候条件

と土質が茶の栽培に理想的であり、周年茶を収穫できることもあって、その後茶のエステートは急速に拡大し、1930年には既に8,000人の常雇労働者と3,000人の臨時雇労働者が数えられた（LU：501）。

しかし、1930年の時点では、茶の栽培の急速な進展に伴う労働需要の拡大がキプシギスの生業形態や土地保有形式に与えた直接的な影響はまだ必ずしも顕在的なものではなかったことにも注目しておく必要がある。上記約11,000人の茶エステート労働者のうちキプシギス人は「極く僅か」に過ぎなかった反面、茶のエステート以外の農場では数千人のキプシギス人が働いていたのである（KK：288）。キプシギスがそれらの農場で働いていた理由は、税金を収めたり雑貨を購入するための現金収入を得るためという以上に、牛の放牧地をヨーロッパ人入植地内に確保するためであった（同上）。

次の事実は大いに注目に値する。1930年頃まで、入植地では、30日当り成人男子が14シリング、（16才以上の）青年男子が8～10シリングで雇われていた（LU：501-502）。ところが、同じ時期（1920年代から1930年代初め）にキプシギスの成人男子には、なんと僅か30日当り6シリングしか支払われていなかったのである（同上：503-504）。「何故ならば、彼等は、家畜の放牧地という付帯的な埋め合せを得ることの方に執心したからだ」（同上：504）。1931年のディストリクト・コミッショナーの年次報告は、放牧権が「（キプシギスの）成人男子に“kitchin toto”以下の賃金で働くことをませている」と書いている（同上：504, note 12）⁵⁶⁾。

では、キプシギスのどの位の人口がスクウォッターとしてヨーロッパ人入植者の農場やエステートで働いていたのだろうか。マナーズは「この10年（1920～1930年）間のピーク時には、（キプシギス）保留地を取り囲む農場に“スクウォットしている”キプシギスの家族は、総計15,000と推計されるキプシギス全家族のうち約2,500から3,000に達していたものと思われる」（同上：503）とする。

今かりに、この推測を妥当なものとし、さらにこのピーク時を1930年と仮定してみよう。すると、単純に計算すれば、1930年におけるキプシギスのスクウォッターの人口比は16.7～20.0パーセントになる。

バートンによると、キプシギスの総人口には1920年には71,091人であり、そのうちヨーロッパ人入植地内に住む者は8,238人である(Barton, 1923: 45) ので、同年のスクウォッターの人口比は11.6パーセントになる。

これらの数字に基づけば、1920年から1930年の10年間に、スクウォッターは人口比で1.4～1.7倍に増えたことになる。この値は、極端に急激な増加とはいえない。また保留地にまだ80パーセント以上の人口が住んでいた。この事実は、保留地のキプシギスの一部分が時々ヨーロッパ人入植地の農場で賃労働をして放牧権を確保している限り、民族全体の経済生活には大きな変化が生じないで済む状況であったことを示唆しているといえるだろう。⁵⁷⁾

オーチャードソンは、この時期のキプシギスの生活に言及したと思われる論文の中で次のように書いている。「(キプシギスは) 誰もが好きな時に好きな場所に家を建てられるし、(キプシギスの) 土地の一方の端からもう一方の端まで牛や山羊／羊の群を追っても構わない」(Orchardson, 1931: 471)。マナーズ自身、この箇所を引用して、こう言い添える。「そして、トウモロコシ、シコクビエ、それに園芸野菜の栽培にふりむけられる比較的小規模な畑を作るための余地はまだ沢山あったのだ」(CNLT: 267)。⁵⁸⁾

ここで、この時期に、キプシギスの農耕、とくにその技術的側面にどのような変化が起っていたかを見ておく必要がある。きわめて重要な歴史的変化は、1921年に、ミッションで教育を受けた一青年が犁を買って使用し始めたことだ(KK: 288-291)。彼は、北部のベルグート生まれで、中部のブレティに住むアラップ・バルゴチャットである(LU: 502, 505)。犁の数は、1927年には65(KK: 288)、1929年には

249(同上)、1930年には400(LU: 504)に増えている。

しかしながら、伝統である共同体的な土地保有制度のもとでは、犁耕の経済的効果は極小化されざるを得ない。

土地保有の土着的型式は1930年にもまだ広く行われていた。だが、こうした土地保有形式によって犁を最大限に効率的に利用することが阻害される傾向があった。一般的に、トウモロコシ畑は、伝統的なシコクビエ畑と同じ程度の大きさで、その規模を2～3エーカーにまで拡張しているキプシギスはほんの数える程だった(LU: 505)。

マナーズが、この時期の経済的变化の中で最も重要視する要素は、キプシギス保留地を取り巻くヨーロッパ人入植地で茶のエステートの経営が軌道に乗ったので、隣接するキプシギス保留地に対するトウモロコシの需要が「空飛ぶロケットの如く急上昇した」事実である。1932年には、この地域の茶のエステートの労働者達の労賃や交通費や食糧費のために支出される金額が20万ポンドにのぼり、9,000エーカー以上の畑でとれるトウモロコシが彼等の食糧として買い入れられる必要があった(KK: 290)。即ち、キプシギスは、拡大し続ける巨大なトウモロコシ市場の真唯中に住んでいるという、当時のホワイト・ハイランドでも稀有の経済的環境にあったのである。

1925年のディストリクト・コミッショナーの年次報告書は、「トウモロコシを栽培している地域はこの2～3年のうちに大いに拡大した」と述べている(CNLT: 272)。また1928年の同報告書には、保留地の住民でヨーロッパ人に金を払ってトラクターで畑おこしをして貰う⁵⁹⁾者が現われたことが記されている。さらに1928年の同年次報告書は、キプシギスがトウモロコシ栽培にあまりに熱心なので、やがて労働市場から「脱落」するのではないかとの懸念を表明している(同上: 271)。マナーズは、キプシギ

ス保留地に接触しており、ほとんど無尽蔵の労働力供給源となっている人口稠密な、グシイ保留地とルオ保留地が存在していなかったならば、茶のエステートの管理者達は、キプシギスのトウモロコシ栽培を止めさせるか、少なくとも削減させる措置を取っただろうと推測する(同上)。

キプシギスのトウモロコシ栽培は、1920年代末には加速度的に進行し、もはや不可逆の潮流となっていた。この事実は、たとえば、ケリチョの街で家畜の皮とトウモロコシをキプシギスから買いあげていた8つの大きな店の年度毎の購入総額の推移を見ても十分に窺える。1928年、1929年、1930年の買いあげ高は、それぞれ529,875シリング、637,500シリング、825,000シリングであった。特に1930年には、トウモロコシの単位価格がかなり低下し、皮の買いあげ総額に占める割合も50パーセント以下に低下していた(LU: 505) にもかかわらず、買いあげ総額は、前年よりも29.4パーセントも増えている。つまり、第1次世界大戦までは、最初には強制的な労働＝土地契約によって、次には税金支払いの必要上賃金労働に参入していたキプシギスが、この時期には、ヨーロッパ人の提供する様々な物品を購入すること自体を目的として賃労働に加わるのみならず、優利な換金作物であるトウモロコシの栽培をも自ら求めて積極的に行うようになっていたのである。それ故、この方向への拡大を妨げる伝統的な土地保有慣行への「何らかの適応が生じつつあり」、それを「鼓舞する市場状況が既に存在していた」(同上)のだった。

他方、1920年代末から1930年代初めにかけて、スクワッターの放牧権の制限が始まっていた(CNLT: 271-272)。現金の魅力を既に知っていたキプシギスは、増大するトウモロコシ〔と肉〕の需要に応じるべく牛(animals, cattle)の売却を増し、トウモロコシの生産を拡大していった(LU: 504, CNLT: 171-172)。キプシギスは、「最初は山羊／羊の生皮と牛の生皮を売って“換金作物”の投機に乗り出していったが、急速に牛(cattle)の売却へ、

次いでトウモロコシの売却へと移っていった」(LU: 507)。

マナーズの主張を要約すれば、次のようになる。キプシギス保留地に接して極めて魅力的なトウモロコシ市場が急速に発展し、他方新たな放牧地が得られない状況の中で、キプシギスの経済は、この時期に牛からトウモロコシへとかなり急激に重心を移しつつあった。

それでは一体、この時期に牛の価値はどのような変化をこうむったと考えるべきであろうか。犁耕が徐々に進行しつつある事実は、何よりも審美的な価値の中心であり、情緒的な満足の源泉と考えられてきた去勢牛を経済的な理由から、犁耕に用いることを許容するという実利用な価値観がキプシギスの間に育まれ、一般化されつつあることを示している。

マナーズは、1920年代から1930年代にかけて、キプシギスによるルオとグシイの両民族からの牛泥棒が急増したと報告している(KK: 288-289)。この場合、伝統的な略奪戦とは異なり、小人数で素速く盗むやり方が用いられ、盗まれた牛がしばしば牛市でさばかれた。

さて、マナーズのいう「牛」とは、一体どんな牛であろうか。彼は終始この点を曖昧にし続け、animalsとかcattleとか書いているものの、一度もcowsとは表現していない。私のインフォマント達は、ケニアの独立直前までキプシギスは決して牝牛を手放さなかったもので、牝牛を新しく買い取るにはルオやグシイなどとの土地境まで出かけなければならなかったものだと語っている⁶⁰⁾。キプシギスは去勢牛の多くを売り、その分だけ牝牛を(盗んだり、買い取ったりして)他民族から補充しようとしたのだと考えられる。男性が、牝牛や去勢牛と自分を同一視するが故に尊重し、経済性では牝牛には比べようもない程劣る去勢牛を少しでも沢山飼って牛群を膨張させて自分の威信を誇示しようとする文化慣行が次第に弱まっていたと言えるだろう。

3. 1930年からケニア独立（1963年）前後まで

1930年からケニア独立までのキプシギス社会の歴史的变化を一言で要約すれば、伝統的な共同体による土地保有がいよいよ突き崩され、キプシギスランドの隅々に至るまで土地私有制度が浸透する過程といえる。

1930年代前半は、いわば土地私有という観念の火種がキプシギスランドの沃野にこぼれ落ち、チョロチョロと燃えながら、やがて燎原の火となって全土を焼き尽す勢いを潜かに養っていた時期である。この当時の記録は、この予感をめぐって微妙な動揺を見せている。先に見た通り、1931年の論文では、オーチャードソンは、まだこの変化の予感を全く感じ取っていない。彼は1910年10月にケリチョに程近いチャガイックに（弟と共に）入植し（Matson, 1961）、やがて2人のキプシギス婦人を娶った。彼は常にキプシギスの人々と文化に強い関心を寄せ、深い理解と敬愛の念を抱き続けた英国人であり、「密接にキプシギスの人々と交って、多くの点でこの部族の一員となりチェモス、即ち“何でもかんでもする男”と呼ばれ……流暢なキプシギス語を話した」（同上）。かつて彼の70エーカー程の茶園で働いたことのある私のインフォマント達によれば、オーチャードソンは毎火曜日「法廷」に行ったが、⁶¹⁾月曜日毎にキプシギスの老人達を集めては、竹の茂みの下蔭でビール・パーティを開き、様々な話を聞いて記録をとった。あらゆる点でキプシギスの事情に最も通じていたヨーロッパ人といえる彼でさえも、同年に彼の居所から程遠からぬ所に秘んでいた重大な変化の兆（後述）を全く察知していなかったようだ。

1934年のカーター委員会も、「この部族は土地の私有が現れる段階に達しているというには、明らかに程遠い」と報告している（CNLT: 268）。また、同年のディストリクト・コミッショナー報告には、キプシギスは、「共同体以外の土地保有体系を持たない」と記されている（同上）。

だが一方では、1931年のディストリクト・コミッショナーの年次報告書には、「原住民、主としてミッション（で教育を受けた若者達）が、キプシギスの伝統として確立している、自分の耕地の周囲に柵をめぐらす義務を放棄してしまっている」という事実が書き留められているし、1934年には別のディストリクト・コミッショナーが、「犁の所有者は非常に大きな地域を耕す傾向を示し、こうして放牧に利用できる土地を狭めている。もしソティックの農場から何時かスクウォッターが追い出され、彼等の牛を連れてリザーブへ帰らなければならないとしたら、家畜の過剰保有という問題が持ち上りそうだ」と既に的確に将来を予見していた（KK: 289）。

この深く潜行しながら確かに胎動を始めていた変化とは、個人による土地の囲い込みであり、その口火を切ったのはアラップ・バルゴチャットである。⁶²⁾彼は、1930年か1931年頃に、丘の上の自分の家と丘の麓に建てた母親の小屋との間の広さ約5エーカーの、縦長の帯状の土地を2頭の去勢牛を用いて犁耕した（KK: 292）。⁶³⁾

当時トウモロコシ畑もシコクビエ畑と同様ほぼ1エーカーの広さが普通だった。彼は、畑の周囲には耕作者が自ら柵をめぐらして家畜の食害から作物を守り、ひいては家畜による作物の食害をめぐる紛争を防ぐというキプシギスの慣習法上の義務を守らなかった。その理由は、彼の耕作地が広すぎたからではない。彼にはふくむ所があった。当然のごとく年齢集団の他の成員の家畜が彼のトウモロコシを食害すると、彼は年齢集団の老人達の諫めに耳を貸さず、植民地政府が設置した「地方アフリカ裁判所」に訴え出るぞと逆に長老達を脅かして、次のような提案を飲ませてしまった——昔であれば、彼は近隣集団によって死刑に処せられたであろうが。その提案とは、近隣集団の人々がバルゴチャットのトウモロコシ畑と境を接してそれを包み込むようにシコクビエ畑を作ることによって彼のトウモロコシ畑を家畜による食害から守ることであった。こうしてバルゴチャットのペースのままに紛争が一旦回避される。人々がシコクビエ

の耕作に使った土地を翌年——先にも述べた理由から連作を避けるために——放棄すると、バルゴチャットは急速くその跡地を犁耕してトゥモロコシを栽培する意図を示すと共に、昨年と同じ提案を人々に飲ませてしまった。トゥモロコシは、連作がきかないシコクビエなどとは異なり、5年間は生産量を落さないで同じ土地で作り続けられる、彼は毎年同じ提案を人々に飲ませてトゥモロコシ畑を拡大し続ける。6年目には、囲い込んだ土地のうち（1930年か1931年に）トゥモロコシを植え始めた最奥の部分は、慣習法に従えば、トゥモロコシが作られない以上休閑地となり、近隣集団の誰にでも使用する権利が生じることになるのだが、バルゴチャットは6年目にはその部分に柵をめぐらして牛囲いとして確保してしまった。牛囲いもまた、慣習法が個人に用益権を認めてきた土地だからである。彼は輪作方式を導入して地力を回復させたこの土地をその後再びトゥモロコシ畑として用いた。

このやり方で年々トゥモロコシ畑を外側に拡大し続けることによってバルゴチャットは、1935年には約35エーカーを囲い込み、その後何年かのうちに「自留地」を250エーカー～300エーカーにまで増やした（LU：506）。近隣集団の人々は彼を蔑み、非難したが、キプシギスの慣習法は耕作面積を制限してはいなかったのだから、皮肉にも、彼等自身が彼のやり方を真似て囲い込みを始めるまで彼の囲い込みの拡大を制止できなかったのであった（CNLT：274）。

こうして、囲い込みによる土地私有化の火の手はキプシギスランドの中央部ブレティ地方にまず上り、北のベルグート地方と南のソト地方へ、最初にはゆっくりと、後には加速度的に波及してゆく。

「一般的にいて、1930年代初めにはこの点（不平等な土地所有）に関する不平を無効にするのに十分な牧地があった」（同上：275）が、囲い込みは1940年代後半から1950年頃に燃え盛り（KK：287、295）、1950年代後半には、キプシギス保留地は寸土に到るまで囲い込まれ分

割されたという（CNLT：269）。

土地の囲い込みの進行と並行して、1940年代後半からヨーロッパ人入植地に住むスクワッターの放牧権の制限が強化され、ついには植民地政府が法によって彼等の放牧権を完全に制限した（KK：286）。これは、当初はスクワッターが友人から（キマナカイとして）預った牛の頭数を減らすことと、最終的にはスクワッターから放牧権を必要としない完全な賃労働者への労働力の切り換えをねらったものであった。この段階は、先に見た1940年代後半のナンディのカップティッチ制度の事例に現れていた過渡的变化の段階によく対応するものであり、カップティッチ制度が経験したものとほぼ同様の変化がキプシギスのキマナガン制度にも生じたと考えるのが妥当と思われる。

このような状況のもと、1940年代なかばから土地紛争の解決が近隣集団裁判の手を離れ、大量に裁判所へ持ち込まれることになるが、裁判所や行政当局は一貫して土地私有化に支持を与え続ける。近代化がキプシギスランドの各地で一様に進行していたわけではないにもかかわらず、どの地域でも1950年代初頭には土地紛争が急速に鎮静化に向ったことが各地の6つの裁判所の年度別の土地係争取り扱い数の推移からはっきりと読みとれる（同上：296-298）。

「第2次世界大戦以前には、保留地の土地へ入る権利を持たないキプシギスの家族は存在しなかった」（CNLT：267）。しかし、1940年代後半から1950年代に放牧権を奪われてキプシギス保留地へ帰らざる得なくなったスクワッター達は、保留地に放牧地はおろか家の敷地さえ見つけるのが難しかった（KK：286）。

土地の登記が始まるのは、ケニア独立の翌年1964年からだが、「キプシギスの間の売買による土地の譲渡は、部族の権威と英国当局によって第2次世界大戦の終りから事実上認可されていた」（CNLT：267）のであり、土地には活発な需要があった（KK：298）。

こうして数百家族が現在のナロック・ディストリクトのジジビショップ（チェマムル）やア

ンガタ・バラゴリの辺りへ移住し、マサイとして住むという——実際には守られることのない——条件のもとでマサイの長老達に受け入れられる(同上)。また1945年から1964年にかけての20年間に3,000～5,000のキプシギスが現在のケリチョ・ディストリクトの外へ出稼ぎに出ようになり、土地をほとんどあるいは完全に失い、保留地や街郊外の寄宿舎から周辺の茶のエステートや農場へ通いで賃労働に出るキプシギスも出始めた(CNLT: 264)。

マナーズによれば、キプシギスの推定人口が22万人に達している1964年の時点でも、多くの土地をヨーロッパ人入植者と法人が所有しており(同上)、急激な人口増加と賃労働の機会の少なさから、土地を持たないキプシギスの人口を抑制する目的で「土地分配計画」が植民地時代末期から始められているにもかかわらず、土地を持たないキプシギスの人口がきわめて速かに再び増加に向うだろうと予測されている(同上: 277)。

とはいうものの、彼自身の用いた資料を見ても、キプシギスランドの「近代化」状況は必ずしも一様であるとはいえない。彼によると、1961年当時の6つのロケーションの粗描は次のようになる——北部の第1、第2ロケーションでは土地の囲い込みの規模にバラツキが見られ、中部の第3ロケーションでは囲い込みがすでに始まっており、中南部の第5ロケーションは乾燥地なので囲い込みは散漫、南東部第4ロケーションは比較的最近囲い込みが始まり、南西部第6ロケーションは最近開発が始まった地域である(KK: 297-298)。

・マナーズは、キプシギスが「園芸的用益権と共同体の放牧地(という土地保有制度から)土地私有へと迅速に移行した故に、ニャンザ州(当時)——というよりもケニア——の“見本部族”として認められるに至った」(LU: 507)と、キプシギスの急速な近代化を強調する傾向が極めて強い。そのためであろうか、たとえば(先の行政区分でいえば第6ロケーションに当る)チェパルングがマサイランドからキ

プシギスランドへ編入されるという歴史的な大事件にも全く言及していない。

チェパルング地域のキプシギスランドへの編入は1937年に実施されたが、⁶⁵⁾その面積は148平方マイル(約380km²)であり、当時821平方マイル(約2,100km²)であったキプシギス保留地(Peristiany, 1939: 283)は、一気に18パーセントも領域を拡大したのである。同年に南西部から最も遠い北部のベルグートの北部で現地調査したペリスティアニは、チェパルングの「大部分は牧畜や農耕にほとんど役に立たない深い森である」⁶⁶⁾と書いているが、実際にはキプシギスランド各地から人々が入植して焼畑形式の開墾が進み、豊かな農牧地となったのだった。この土地の土質は茶には適さないが、トウモロコシ栽培に適し、他の各地とは異なり、今日でも全く施肥しないでも地力が少しも劣えない。

また、ケニア独立後、かつての西ソティック入植地のほぼ全域がソティック・コンプレックスと呼ばれるセトルメント・スキームとして、土地の無いキプシギスに開放されたし、これ以外にも北部のチェプスシル、フォート・ターナン(チルチラ)などにもセトルメント・スキームが設けられた(Ojany & Ogendero, 1973: 142-145)。たとえば、ソティック・コンプレックスの一部であるカイトット・ランチが個人に分割されたのは漸く1983年であるし、同じくその一部であるカプクレス・ソサエティのように土地が共有され、まだ個人に分割されていないソサエティが方々にある。⁶⁷⁾

以上の例から見ても、マナーズは、キプシギス社会の変化を(1)トウモロコシ市場の急激な拡大と、(2)新たな放牧地の欠如、という2つの恒常的な条件を前提として、あたかも両者が強度の相関変数であるかのように分析しているけれども、(2)に関しては幾分なりとも留保して考える必要があるといえよう。少なくとも、ケリチョを中心とする茶のエステートに臨接した、いわばキプシギス保留地の中心地域とそれ以外の地域とでは、マナーズのいう「近代化」の進行に

はかなりの差があったと考えておく必要があるだろう。

ではこの期間に、キプシギスの牛の価値はどのように変化したであろうか。マナーズの議論は、まず要約を試みておくと、(1)牛がほとんど完全に実利的に取り扱われることになったが、(2)それにもかかわらず、その経済的価値はやがてトウモロコシに主座を譲った、ということになる。

私がこれまで便宜的に区分した、第一次世界大戦から1930年までと、1930年からケニアの独立までという2つの時期にまたがる牛の価値の変化を彼は次のように述べている（CNLT：271）。

大いに賞揚されたキプシギスの牛（cattle）でさえも大農場に売れば現金に換えられるようになった（1914～1930年）頃には、放牧地はまだひどく不足してはいなかった。

しかしヨーロッパ人が土地を手に入れてからは過放牧によって、その質は着実に悪化していた。後に（1930～1950年代）共同の放牧地が完全に消え失せてしまい、キプシギスがますます耕作に頼るようになると、彼等は、1人（当り）の牛群がひょっとしたら大き過ぎるのではないかという考えを受け入れることがそれ程難しくないことに気付いた。

去勢牛や牡牛は、犁耕や種付けに必要な最小限度にまで削減されたと考えられる。牛の商品価値が一般的に認められるようになったのであろう、1940年以降1960年頃にかけて、伝統的には妖術と並んで死刑に値する最悪の罪であったキプシギス内部での牛泥棒が盛んになる。この活動は、近隣集団民族間の牛窃盗網とでもいえるものとの連携を背景にして行われた（KK：302）。

そればかりでなく、キプシギスは、やがて乳牛の生産性にも実利的な目を向けてゆく。「キプシギスは、牛乳の——他のキプシギスへの——販売の大きな市場を開発することに大に関心

をもって」いた（LU：509）。植民地政府は、防疫など管理の難しさを理由として、キプシギスが混血西欧種の牛（grade cattle）を持つことをディストリクト・コミッショナーの布令によって禁じ、違反者を厳しく処罰していた。植民地政府は、肉質と牽引獣としての能力に優れたサヒワルと呼ばれる瘤牛と在来種との混血によって牛の質を改善することをキプシギスに勧めるが、キプシギスは関心を示さず、キプシギスがヨーロッパ人入植者から牛乳を買うために支払われる金額の龐大さを嘆き、激しい抗議を続け、ついに1960年の夏に混血西欧種の保有許可を勝ち取る（KK：302-308）。ここには、その内容を問わず、牛群の大きさを個人の権威と神の恩寵を示す表象と見る伝統的な価値観とは明確に異なる、より経済的で目的合理的な価値観に基づいた過放牧への対応の著しい強化が読み取れる。マナーズは、1930～1960年の経済統計資料を分析し、統計に現れる限りでは牛の方が商品としてトウモロコシよりも重要であるように見えるけれども、統計に現われていない内部経済や統計方法の欠陥などを勘案すると、遅くとも1960年頃には既にトウモロコシの方が実際には遥かに重要な商品になっていたという（LU：507-508）。即ちこの時期に牛は商品として考えられるようになる。しかし、その後商品としてトウモロコシの方が牛よりも重要だと考えられるようになり価値の重点が移ったこと、言い換えれば、「牧畜はまだ大変重要だが」（同上：518）、キプシギスが牛牧民から「トウモロコシを換金作物として栽培するのに成功した小農」に変わったとマナーズは結論づけたいのである。しかしながら、キプシギスの牛の商品価値に対する認識の進化がキプシギス社会における牛の伝統的な価値の他の側面の消滅や衰退をそのまま意味しているとは必ずしもいえない。マナーズが論証して見せたのは前者であって、後者はあくまでもそれ自体として別に論証されるべき独立の命題と考えるべきである。

この問題と深く関るのが、この時期にキマナガン制度がどう変化したかという問題である。

マナーズは、伝統的社会体制の中でキマナガン制度が果たした役割を重視する反面、キプシギスがヨーロッパ人と接触した後はこの制度がひどく修正された形で存続している(KK: 233)と、ほんの数行でこの制度に触れているだけであり、それが一体どのような変化を蒙ったかについては、全くその実態に触れていない。このキマナガン制度の取り扱い方の奇妙な程の軽微さは、牛の商品化がキマナガン制度の存在理由を脅かし、さらに、牛がキプシギス経済全体に占める価値の低下がその傾向に一層拍車をかけたのは自明であって、キマナガン制度は近代化過程の分析や新しい社会の分析においては顧る必要もないものに衰微したと彼がみなしていることの反映であろうと思われる。

だが私達は、先に試みた、1940年代後半のナンディのカップティッチ制度の過渡的变化の検討から、同制度の「内的発展」(involution)ともいうべき実態を見出した。この事実を踏まえると、近似性の著しい歴史条件の中でキプシギスが示した、牝牛を売却したり、乳牛の質的な改善によって牛群の縮少をはかるという、一見資本主義的な経済原理のみに支配されたと思われる適応現象も、人口の急激な増大と過放牧の深刻化という状況の中で「牛複合」を維持するうえでの「内的発展」の過程の一側面として捉えることができるのではあるまいか。この点を検討しておかねばなるまい。

もう1つ見逃してはならないことがある。仮りに、マナーズの主張する通り、実際に商品価値において牛がトウモロコシにとってかわられたとしても、一体その事実をもってキプシギスが牛牧民から農耕民へと変化したことの証拠とみなし得るだろうかという疑問がどうしても残る。むしろ、トウモロコシ栽培の方が現金経済に適応するにはふさわしい手段であり、牛は「別の条件」のためにこの点では背後に退いたと考える方が、実態に即せば妥当だと私は考える。その別の条件とは、簡単にここで述べておけば、資本経済に深く取り込まれてゆく過程でもなお牛がキプシギスという民族の社会組織上

の媒体として金におき換えられない価値を維持していたということである。

それを実証する1例として氏族の団結を確認する機能をもつ氏族員が殺人の血償を分担するという慣行が挙げられる。私は既にこの論文(第1章第3節の注11)で、現在でも血償の分担として殺人者の氏族員が支払う牛や山羊/羊(ないしはその代替物としての現金)が、日常の現金経済活動における商品価値とは異なる価値基準で評価されていることを述べておいた。

マナーズは、キプシギスという牛牧民の社会における牛の固有の価値や、その伝統的側面に関して必ずしも踏み込んだ実証的な考究を試みておらず、従って、近代化過程でそのどの側面がどう変化し、どの側面が維持されたかを論じていない。彼は、いわゆる東アフリカの「牛複合」社会の研究者の多くが「神秘主義」に傾いていたと批判し、それらの記述は、「結婚自体が牛中心性の副産物であるかのように見える場合がある」(KK: 232)といい、メアーの次の言葉(Mair, 1948: 189)に対して全面的な賛意を表す。

経済的な利点がそれなりのものであり、そのことを人々がはっきり理解してさえいるならば、(人々の間に)伝統という保守的な力が存在していることは、経済的な利点が魅力的であることの反証とはなり得ない。そして持ち主が家畜の数を減らして質を向上させることに乗り気でないというアフリカ人の保守性を示す典型的な事例もまた、多くのアフリカ社会の際立った特徴である家畜の数に対する情緒的で宗教的な観点から説明されている。だがこの場合でも、保守性そのものよりもむしろ誘因となる刺激が足りないことの方が強調されるべきではあるまいか。

なるほど、この点でキプシギスは確かに柔軟な適応を示している。できる限り「神秘的」な説明を排するマナーズの選択も当を得ている。しかし、「神秘性」を排せば全てが経済性にな

と考えるのもあまりに短絡的だろう。

マナーズは、牛を叙述するのに *animals* とか *cattle* という極めて概括的な語のみを用いている。だが、キプシギスにとって、牛は価格という単一の基準で律することのできる単純な商品ではなく、一個の牛が、それぞれが種々のレベルで分類される諸価値の具体的な複合体なのである。

今、ある牛の経済的な価値についての評価に限ってみるとしても、少なくとも3つのレベルでの分類を知らねばならない。第1は性（牡、牝、去勢）と年齢及び出産経験に基づく牛の多種多様なカテゴリーである。第2は、自家の牛と他家から預った牛（キマナカイ）との区別である。第3には、相続と可処分性に関わる諸カテゴリーである。この第3の分類を理解するために、オーチャードソンの言葉に耳を傾けてみよう（Orchardson, 1931: 468）。

ある人物はとて多くの牛と山羊と羊を持っているように見えるだろう。だがそれらの家畜は彼のものではなく、彼の子孫に永遠に受け継がれるべきものなのだ。彼はたとえ自分が飢えていようともそれらの家畜を殺すことも、売ることも、譲渡することもできない。彼がそのように処分できるのは、自分の努力によって手に入れた牛（*tooga ce kibaru*）〔sic.〕だけであるが、それらの牛であっても彼が死ぬと家族の中に受け継がれてゆくことになる。

実は、この事実こそが、キプシギスが当初納税のために家畜を売却することを妨げ、キプシギスに賃労働を受け入れさせた大きな原因であった。マナーズは、家畜が生計に占める価値の大きさにもっぱらその理由を求めたけれども、実際には牛の財産としての固有の性格と相続上の規則とが、牛を商品として売却することを不可能にしていた事実も極めて重大であった。そのことを、先に引用したオーチャードソンの言葉が適切に教えてくれる。

この第3のレベルでは、牛は次の3つのカテゴリーに分けられる。

- (1)「家の牛」⁶⁸⁾(*tugap ga*) —— 相続によって得た牛
- (2)「婚資の牛」⁶⁹⁾(*tugap koito*) —— 嫁いだ娘と交換に姻族から受け取った牛
- (3)「手に入れた牛」⁷⁰⁾(*tugap kibar* または *pareiywek*) —— 他部族から略奪したり、働いて買い取った牛

(1)は家族と氏族内に受け継がれる牛であり、(2)は息子達（即ち、嫁いだ娘の実の兄弟）だけが自分達の婚資として（のみ）使用できる牛である。(2)を父親が自分勝手に処分すれば、「娘と寝た者」として、社会から厳しい排斥を受けることになる。(3)にしても、既にキマナガン契約の対象として使われているし、牝牛であれば家族の生計を維持するために手元に置いておかねばならず、容易に売却できるものではない。牛乳は、キプシギスが混血西欧種の牛を手に入れるまでは常に不足していたし、それ以前には民族の内部で売買されることも全くなかったからである。

このように、牛はキプシギスの内部経済においてだけでなく、その社会組織の体系化においても不可欠の要素であった。トウモロコシを純粋に換金作物として使用できたのとは異なり、キプシギスの急速な近代化の過程においても牛を換金用に使用するには一定の制約が課されていたことに注意しておく必要がある。

マナーズは、ヨーロッパ人との接触以前の婚資慣行の歴史にすら、キプシギスの実利的傾向を読みとろうとしている。彼によれば、1890年代に口蹄疫の流行によって牛がほとんど全滅した後にも婚姻率は低下せず、牛ではなく「婚価（*bride-price*）は当時の生き残りの通貨である穀物、山羊、羊、蜂蜜」などによって支払われたという（KK: 232）。

マナーズは、彼のインフォマントの幾人かが自分達の父親などのこうした形での婚資の実例を挙げたと述べている。一方私自身は寡聞にしてそのような事例を、私の集めた数百例の中に

1例も見出せなかった。いずれにせよ、マナーズの述べていることが正しいとみなして、今大切なのは牛がいなかったために牛の代りとして他のものが支払われた期間があったという事実を認めることよりは、むしろそのようなドラスティックな変化を蒙った一時期があったにもかかわらず、婚資支払いの新たな慣行が定着せず、キプシギスが急速に牛を婚資の支払いに使用するという慣行へ立ち戻った事実の方に注目することである。無い袖は振りようもないが、古い袖があたかも残っているかのように振られていたのである。

そればかりではない。婚資として支払われる家畜の数がヨーロッパ人との接触の後急速に増えていることに注目しなければならない。私の聞いたところによれば、1890年頃の婚資は牛1頭程度であった。ペリスティアニは、1937年当時の婚資が、通常牛8頭と山羊／羊23頭であるが、ここ数年のうちに授乳中の牝牛1頭と若い牝牛1頭が増えていると報告している（Peristiany, 1939: 59）。⁷¹⁾

先に見たように、マナーズは第1次世界大戦から1930年までの期間にキプシギスが「牛」を売り始め、次いでトウモロコシへと経済の重心を移しつつあったと述べた。だが、ペリスティアニの報告に見る通り、この事実が必ずしも牛の社会的価値を低めつつあった訳ではない。オーチャードソンは、「今や（パックス・ブリタニカ以降、牛の略奪が主目的である他民族との）戦争が禁じられたのであるから、ヨーロッパの貨幣の唯一の使い道は、牛、羊、山羊を買うことである」（Orchardson, 1931: 467-468）と書いている。マナーズ自身、「現金の余剰は牛の買い入れに用いられるのが普通だった」（LU: 499）と認めている箇所がある。婚資額の増大は、キプシギスの労働市場への参加と牛の取り引きやトウモロコシ栽培を拡大したであろうし、過放牧の進行を導いたことであろう。しかしこれらのことがらが、この時期に牛の商品価値が低下したことによってではなく、牛のもつ社会組織上の交換価値がむしろ向上し

たことによってもたらされたということを確認しておかなければならない。

マナーズは、婚資の金納化が急速に進み、一般化することを予想していたが、実際には今日でも300～800シリングの現金は新婦の両親への贈物として使用される付帯的な要件にしかすぎず、婚資それ自体は原則として牛と山羊／羊で支払われなければならない。その大きな理由の1つは、先に述べた牛の社会的カテゴリーに関係する。婚資として得た牛は原則として、新婦の兄弟が自分達の嫁を貰う時にのみ用いるべきものである。つまり、「婚資の牛」は姻族関係による政治的同盟関係結成の媒体として社会を構造化する機能を担っている。だが、婚資が現金で支払われると、何時の間にか曖昧に現金が使われてしまい、婚資が上記の機能を果しにくくなり、そのために家族成員間に多くの混乱と不和が生じたという歴史的経験の反省のうえに立って婚資が今でも牛で支払われているのである。

また興味深いのは、キプシギスでは、近隣の諸民族と比べて娘の教育水準が婚資類に反映する程度がきわめて低く、ほとんど取るに足りないこととみなされていること、それに、婚約交渉でも支払われるべき牛の数と性、体色及び年齢によるカテゴリーが問題にされるにもかかわらず、それらの牛が在来種であるか混血西欧種であるか、それともその混血であるかが問題にされないことである。これらの事実は、血償支払い慣行に見られると同様に、婚資支払いに関しても牛が日常の現金経済活動における商品価値とは異なる独自の価値基準に基づいて評価されていることを物語っている。

同様の事実は、キマナガン慣行の一側面についてもいえるのである。ソールトマンは、彼の調査地のうちレルグディエットでは、混血西欧種の牛が婚資としてもキマナカイとしても用いられないとし、「ここで重要な要因は混血西欧種の牛が伝統的なキプシギスの牛複合においてはまだ構成要素となっていないことだ」（Saltman, 1977: 266-267）と述べている。

マナーズの3本の論文の論旨は、次の一文に要約されるといってよいだろう（CNLT：266-267）。

この論文で扱われている土地所有の変化をもたらした諸状況は、ケニアとキプシギスに固有のものであるが、変化の形態と結果はたいして特異的ではない。この意味で、キプシギスの適応は、変化に対して「規定された」、「避けようのない」、あるいは「予測できる」収斂性の動態をそなえている。それ故、キプシギスの適応は、産業革命として知られている強烈な伝播の時代以来とくに人間の発展を特徴づけてきたあのことさらに人間的で文化的な進化の一例として挙げることができよう。

キプシギスがまず植民地化による土地の大規模な収奪と徴税とを契機として否応なく現金経済にからめ取られ、やがて換金作物として有利なトウモロコシ栽培の拡大を契機として土地を共同保有制から急速に私有制へと移行させたという点では、確かにマナーズのいう通りであろう。だが、このような一般化が彼の結論であるとすればあまりにも貧しかろう。彼の論理的枠組から一貫してこぼれ落ちてしまったキプシギスの「牛複合」の歴史の変遷と「内的発展」の過程にこそ、伝統的な無頭制の牛牧社会であるキプシギス社会の「変化の形態と結果」の特徴を読み取るべきではないだろうか。

IV 今日のキマナガン制度の諸相と意義

この章は、これまでに検討を加えてきたキプシギス経済とキマナガン制度の歴史的变化を背景として、今も連綿として続いているキマナガン制度の今日的意義を探ると同時に、今日の諸事例の分析を通して逆にこの制度の歴史的变化を一層明確に描き出すことを目的とする。

1. 変化の諸相

私の4次にわたる現地調査の主たるフィール

ドは、リフトバレー州ケリチョ・ディストリクトの南西部チェパルング・ディヴィジョン⁷²⁾のンダナイ・ロケーション⁷³⁾であるが、そのうちでも特にンダナイとチェプレルウォの相接する2つのサブロケーションが中心となった。チェプレルウォ・サブロケーションはほとんど全域がかつての旧ヨーロッパ人入植地であり、現在ではほぼ全域がチェプレルウォ・セトゥルメント・スキームとなり、各戸が約40エーカー程の土地区画を1つないし2つ与えられ、現在でも毎年政府へローンを返済し続けている。一方、ンダナイ・サブロケーションは旧キプシギス保留地に属し、各戸平均約4～5エーカーの土地を保有している。

チェプレルウォ・サブロケーションは、グシイの居住地であるニャンザ州キシイ・ディストリクトのエケルボ・ロケーションと境を接する。他方、ンダナイ・ロケーションの南に隣接するアボスイ・ロケーションは、マサイの居住地であるリフトバレー州ナロック・ディストリクトに接している。そしてナロック・ディストリクトには多くのキプシギスが越境して住んでいる。ンダナイ・ロケーションはチェパルング・ディヴィジョンの中心として、グシイとの土地境であり且つフロンティアとしてのマサイランドへの前進基地であるといえる地域である。

マナーズが細かく論証したとおり、キプシギスは偶然にも歴史的に恵まれた経済環境におかれたために、かなり速やかに現金経済に適応した。それでも、私の調査地であるチェパルング地域は、ナロック・ディストリクトのキプシギスの居住地域である、いわゆる「マサイ地区」に次いでよく伝統の生きている土地柄といわれている。現在でも、事実、ほとんど全ての成人男性がキマナガン契約を結んでいる。とはいえ、その契約は我々が先に概観した伝統的なあり方とはかなり違ったものになっている。以下に、私自身が収集したキマナガン契約の事例のうちでも典型的なものや特徴的なものを幾つか選んで、この制度に歴史的にどのような変化が生じたかを具体的に検討する。⁷⁴⁾

《事例1》

キプレレ・アラップ・ムサニ（45才）は、旧保留地にあるンダナイ近隣集団に住み、単婚である。長女は既に嫁ぎ、18歳になる未婚の長男以下9人の子供を養っている。4エーカーの自分の土地のうち2エーカーにはトウモロコシと僅かの野菜を植え、残る2エーカーを放牧地にあてている。生計を維持するために、道路人夫などの賃仕事があれば努めて出るし、大工の補佐もする。牛は、チェプコルゲン（N/2）、レルギナ（N/1.5）、サモイ（N/1.5）、チェボイス（N/2）の4頭の経産牝、3頭の未經産牝（いずれもN）、去勢牛（N）と牡牛（N）を1頭ずつ、それに4頭の仔牛（いずれもN）を持っている。⁷⁵⁾

ムサニは貧しく、1983年8月の日照りの時には、小さな子供達に与える牛乳に事欠いたので、彼と同年に同じ隔離小屋でイニシエーションを受けた同年齢組仲間（*botum*）であるアラップ・トーから上記のチェボイスをキマナカイとして譲り受けた。トーは、ンダナイ・サブロケーションの東隣りに当るカプケレイ・サブロケーションのシオンギロイ近隣集団に住んでおり、25エーカーの土地を持っている。

ムサニもトーも、ムサニの土地が過放牧状態であることを承知していたが、草は道ばたの草を食わせれば何とかなんと、ムサニがトーを説得した。

これは貧乏な者が比較的豊かな者に牛を借りるという点においても、同年齢組員の中でも最も親しく、兄弟以上に親密になる同じ隔離小屋の仲間⁷⁶⁾を頼っている点でも、また貸し出された牛が在来種である点でも、キマナガンの最も古典的な事例に近い。

道ばたの草を家畜に食わせる権利は、土地共同保有制の僅かな名残りとして、万人に開かれているけれども、敢えてそれを行使するのは切端詰った貧乏人だけである。

《事例2》

キプスィエレ・アラップ・マイナ、自称“マルルバイ將軍”（47歳）はンダナイ・サブロケーションのキプテンデン近隣集団に住み、単婚で、5人の息子と3人の娘の父親である。長女と次女は既に嫁いだが、22歳になる長男はまだ未婚である。キプテンデンの4エーカーの土地のうち3エーカーはトウモロコシ畑で、残る1エーカーが放牧地である。彼はこの他に、近くのカガスウィック近隣集団に4エーカーの放牧地を持っている。保有する牛は全てが在来種で、経産牝は4頭。雨季産乳量は、1頭の1壺を除いて皆1.5壺である。この他に7頭の去勢牛と1頭の牡牛、5頭の未經産牝牛を持つ。

彼は在来種の経産牝牛を3頭キマナカイとして他所に預けている。いずれも1982年1月にカプクレス・ソサエティに住む異母弟であるリヤード・アラップ・ヨムドに貸し与えた。当時長引く日照りのためマルルバイの土地には草が足りなくなっており、他方リチャードは子供に与える牛乳に困っていた。カプクレス・ソサエティでは将来各メンバーに約40エーカーの土地が分譲される予定だが、いずれにせよ、放牧地は共有で広く余裕があるが、メンバーは概して貧しく、牛が不足している。そこでマルルバイ兄弟の利害が一致したのだ。当時この3頭共に既に妊娠中の未經産牝牛だったが、間もなく出産して乳を出し始めた。現在もそれぞれの牝牛が1頭の仔牛に授乳しているが、もちろんこれらの仔牛も一緒に預けられている。

マルルバイは、現在、自分がキマナカイとして借りている牛を持たないが、若い頃には何頭か持っていた。ニョギン年齢組に属する彼の父キメメ（約90歳）が1950年に同年齢組員でマサイ地区のアンガタに住むパロンゲン・アラップ・ランガットから、子供達の牛乳を確保するために、在来種の牝牛を1頭借りた。

マルルバイは、1952年にイニシエイトされ、

その年に妻を娶った。長男なので、キメメが早く結婚させたのだ。結婚後暫くした頃、子供の養育のためにと、キメメがバロンゲンの牛をマルルバイに貸し与えた。1970年頃バロンゲンが没した時にも、父親達の友情を守るためにキマナカイの一部はそのまま残されたが、1976年にバロンゲンの息子のタニャガンが自分の婚資に用いるために、当時マルルバイが飼っていた最初の牝牛の子孫4頭を引き取りにやって来た。この4頭はいずれも雨季には3壘乳を出した。その時までマルルバイは6頭の経産牝牛を既に持っていたので、特に困ることはなかった。

この事例の後半からは、古いキマナガン契約が如何に長期間維持されるかがよく窺われる。しかし同契約が当事者同志の一代限りのものであることも判る。

キメメがバロンゲンに無断で自分の息子マルルバイにキマナカイの牛を貸し与えたことは、伝統的な規則に違反してはいない——規則4参照。一方、1950年に結ばれたキマナガン契約であるこの事例では伝統がよく生きているようだが、既に重大な変化が見られる。それは、キマナカイである牛の子孫が逐次預け手によって引き取られていることである。さもなければ、26年間のうちに最初の仔牛の子孫は4頭ではなく大きな牛群に成長していたはずである。

前半のマルルバイ兄弟のキマナガン契約でも、マルルバイは当歳の仔牛を牛乳生産の必要上リチャードの許に残しているが、前年に生まれた仔牛は既に引き取っている。

もう1つ、放牧地の不足というキマナガン契約の動機に関する新たな要素が前半の例に現れている。この変化は、キマナガン制度の今日的意味を考えるうえで最も重要なものである。キプシギスの間には、マナーズも指摘している通り、宅地程度しか土地を持たない者もいる。だが、ここで注意しなければならないことは、そのほとんどの場合、土地がないことが牛を持たないことを意味するわけではないということである。

《事例3》

カムゲノ近隣集団に住むサウェ年齢組のチェルレ・アラップ・マルスィン（47歳）は、グシイから養取された人物だが、現在妻との間に3人の未婚の息子をもつ。彼は2エーカーの放牧地を持ち、旧保留地では平均的な農牧夫である。自家で飼養する自分の牛は、いずれも雨季の1日当りの産乳量が2～3壘である経産牝牛5頭（N4頭、H1頭）と未經産牝牛1頭（N）、犁耕用の去勢牛2頭（N）、仔牛4頭（N3頭、H1頭）である。

去勢牛1頭（N）を1984年2月に、カムゲノに住むチュモ年齢組のキプロノ・アラップ・コソネイ（60歳）に貸与した。コソネイは3頭の去勢牛を持っていたが、もう1頭去勢牛を手に入れて4頭で犁耕することを望んでいたからだ、因みに、犁耕するには偶数頭の去勢牛を軛に繋いで、あらかじめ訓練しておく必要がある。コソネイは3エーカーの放牧地と2エーカーのトウモロコシ畑を持つだけで、特にマルスィン以上に去勢牛を必要としているとはいえない。ただ彼は、トラクターの借料を削減することを考えていたのである。

他方マルスィンは、カムゲノに住むサウェ年齢組のキプゴスケ・アラップ・チェプティオニ（53歳）からキマナカイとして経産牝（N/4）と未經産牝（N）を1頭ずつ1984年3月に預かった。これらは同月嫁いだ娘の婚資としてチェプティオニに贈られた牛——経産牝（N）1頭、未經産牝（N）1頭、去勢牛（N）1頭、仔牛（N）2頭、山羊／羊5頭、現金700シリング——の一部である。⁷⁷⁾

チェプティオニは、トウモロコシ畑を1エーカーと野菜畑を4分の1エーカー持つだけで、日頃はアボシ・サブロケーションのゲレゲレ・セトゥルメント・スキームでトラクターの運転手として働いている。妻と未婚の息子と未婚の娘の3人がカムゲノの家を守っている。彼の他の牛も皆キマナカイとして方々に分散して預けられている。

マルシンとチェプティオニとは同年齢組員ではあるが同じ隔離小屋の友ではない。ただ、この2人の男性の娘が嫁いだカムゲノの男性達が同母兄弟という間柄にある。しかしキプシギスではマルシンとチェプティオニのような関係を特定する関係名称は存在せず、2人は特別の関係にはない。

チェプティオニは酒代欲しさに自分の土地を少しずつ切り売りしたと噂されている。牛を自家に所有することは、一人前の男として尊敬されるための最低限度の社会的な要請である。彼は牛を自家で保有することも、自家消費用の牛乳を確保することも断念した後でも、あらゆるつてを頼ってキマナガン契約を結んで牛の保有を確保しようと努めていたのである。たとえ、土地を売り払った彼であっていても、娘と交換に婚資として手に入れ、息子の婚資として手放すまでの間自分の管理下にある牛を売り払うわけにはいかない。そうしてしまえば「娘と寝た者」と指弾され、人々から排斥されることになるからである。この事実にも、今日、土地もないような貧乏な者達が自分の牛を確保するためにキマナガン契約に依存しなければならない別の1側面を知ることができる。

なお、この事例から窺える通り、犁耕の導入に伴って去勢牛のキマナガン契約慣行が新しく生まれ、一般化したのである。

マナーズが強調していたように、キプシギスの近代化の過程で、牛の価値は大きく変化した。たとえば、特に去勢牛と自分とを同一視する諸慣行に見られたような牛の審美的な価値は大きく損われた。とはいえ、この側面でさえすっかり消滅してしまったと考えるのは早計である。一例を示そう。

《事例4》

マイナ年齢組のチェモルタ小組に属するチェルイヨット・アラップ・ボイト（推定年齢86歳）は、ンダナイ・サブローケーションのタキテツ近隣集団に住む。彼の土地は約25エーカーあり、旧保留地としては非常に広い方である。そのうち約5エーカーは、モソニック

山頂の林と岩石の多い土地なので放牧にも用いられない。残る20エーカーにトゥモロコシを植え、別の3エーカーは彼の土地に住む第1妻の既婚の末息子（1983年に結婚）のトゥモロコシ畑になっている。他に4.5エーカーをトゥモロコシ畑として他人に賃貸し、残る9.5エーカーを放牧地として用いる。

先妻が没して間もない1977年に、当時16歳だった第2妻を娶った。彼女との間に、現在5才と2才の2人の男の子がいる。

自家で飼っている自分の牛は、経産牝牛2頭（H/4、H/1）とその仔牛1頭ずつ、未經産牝牛が2頭（H）だけで、牡牛はいない。

借りているキマナカイとしては、2頭の経産牝牛（N/4、N/2）がいる。これは、1983年1月に、子供達に飲ませる牛乳を確保するために、チェプレルウォ近隣集団（旧保留地側）に住むアラップ・カップケトウォニから借りた。カップケトウォニは牛を沢山持っているものの、自分の土地が約5エーカーしかなく、過放牧に苦しんでいたので、広い土地を持つボイトの申し出を進んで受け入れた。カップケトウォニはマイナ年齢組に続くチュモ年齢組成員であるが、ボイトとは、チェプレルウォ白人入植地のエドガーの農場で、エドガーが英国に帰る1963年まで共に働いた友人である。

ボイトが他人に貸し出しているキマナカイは、経産牝牛であるチェマレル（N）の子孫とトゥイヤイ（H/5）及びその子孫である。ボイトは、1958年にブレット・ディヴィジョンにあり、ルオ保留地との境界に程近いソンドゥでルオ人からチェマレルを買った。⁷⁸⁾（ボイトによれば）ケニアの独立前後にヨーロッパ人が大量に西洋混血種の牛をキプシギスに売り渡す以前は、キプシギスは去勢牛を売っても牝牛を売ることはしなかったので、キプシギス人は皆ルオ人の所へ牝牛を買いに行った。しかし、折悪しく、植民地政府が、牛の略奪を取り締まる必要から、ボイトがタ

キテッチまで遙々とチェマレルを追いながら連れ帰ることを許さなかった。そこで、道半ばで、ソンドゥとタキテッチとの中間辺りにあるコイワに住みボイトのすぐ下の同母妹を娶っているアラップ・ボルとキマナガン契約を結んでチェマレルを彼に預かって貰うことにした。チェマレルは8頭の仔牛を産んで死んだ。その子孫のうち2頭の経産牝牛(N)と3頭の未經産牝牛(N)、それに仔牛(N)を1頭今でもボルに預けている。

トゥイイは自分の好みの牛だった。ボルの所へ遊びに行った時に「見初め」て、ボルの友人から買い取り、そのままボルの所に預託してある。当時タキテッチは水不足に苦しんでいたが、マウの竹林に程近いコイワは水に恵まれていた。何処で牛を買い求めるかは判らないものだ。旅先で良い娘を見初めて嫁に貰うのと少しも違わない。

ボイトは、自分の好みによく合った体色の牝牛を遠方で「見初め」て買い求め、そのままキマナカイとして同地に残している。この事実、今でも少なくとも年配者達の間に生き続けている情緒的満足の源泉としての牛の審美的価値の一端がのぞいている。また、自分の家族にも知られないで各地にキマナカイを保有する作法が生きていることも判る。

更に、1983年に幼い子供達を養う牛乳に困った時にも、ボイトは沢山の乳を出すトゥイイを取り戻そうとはせず、別のキマナガン契約を新たに結んで、カップケトウォニから別の牝牛を借り受けている。彼はキマナガン契約で強く結ばれた友人を大切にしたのである。ボルとのキマナガン契約は27年を経て今だに継続している。但し、彼のような高齢者が在来種でない牝牛をキマナカイとして預託するようになっていくという変化にも注目しておく必要がある。

キマナガン契約の締結には、乾湿など各地の気候条件や牧畜産業の基盤整備の地域差も関係している。キプシギス社会で、かつて戦士達が年齢集団からかなり離れた所に牛牧キャンプを設

営していたのは、必ずしも生態学的な必要に迫られていたからではなく、現住地に到来する以前の牧畜慣行の伝統の影響や、防衛上の見地からであった。だが土地の私有化によって事情が一変する。囲い込みの進行によって土地が極限まで細分化されると、牧草や水の極地的な不足の解消がキマナガン契約締結上の主要な動機となったし、その状況がもたらした多くの家族のマサイ地区への移住がキマナガン契約締結の新たな動機を生み出すことにもなった。

《事例5》

ゲレゲレ・セトゥルメント・スキームに住むサウェ年齢組のジェレミア・アラップ・チュモ(60歳)は、26エーカーの土地を持つ。自家で飼養する自分の経産牝牛は13頭(G7頭、H5頭、N1頭)で、その1日当りの雨季産乳量は、平均で、Gが1頭当り11~12壺、Hが4.5壺、Nが4壺である。他に未經産牝牛(G)を2頭と仔牛を10頭⁷⁹⁾飼養するが、牝牛は仔牛を除いて1頭もない。

キマナガン契約によって自家に預っているキマナカイの経産牝牛は、チェボメット(H/4)とサモイ(H/4)の2頭である。サモイは1983年に同スキームに20エーカーの土地を持つ、マイナ年齢組のアラップ・カウリアから預けられた。当時、カウリアは過放牧による牧草不足に悩んでいた。ジェレミアの母の父とカウリアの父とが異母兄弟なので、ジェレミアにとってカウリアは拡大的な意味でのアブレイ(abulei)⁸⁰⁾に当たるために、ジェレミアがサモイの受け入れを受諾した。

チェボメットは、マサイ地区のカップウェリアに住むアラップ・サンが1982年にゲレゲレで買ってジェレミアに託したものだ。彼は、将来在来種以外の牛を自家で飼いたいと切望している。だが現状では、マサイ地区はあらゆる社会資本の蓄積が乏しく、牛の身体の消毒槽池もなく、獣医もごくわずかしかないので、在来種以外の牛は同地では生き延びられないことを良く承知している。それで、将来を期して、チェボメットをジェレミアに飼っ

て貰うことにしたのである。2人は同年齢組の親しい友人同志である。

ジェレミアは、2頭の去勢牛(N)を彼の3番目で最も若い妻の父であり、⁸¹⁾マサイ地区のキマナガンに住むアラップ・マラバにキマナカイとして1983年に貸し出している。マラバが犁耕用に使用したいと強引に頼み込んだからである。トラクターを利用できないマサイ地区では犁耕の重要性は一層大きいし、マラバの娘を娶ったばかりのジェレミアはこの要請に抗し切れなかった。おかげでジェレミアは、1984年はトウモロコシ畑の地起しを全面的にトラクターに依存しなければならず、そのサービス代金として大きな出費を負わねばならなかった。

この事例で見ると、姻族関係、とくに義理の父子関係がしばしばキマナガン契約に結び付く。しかしながら、事例5のように義父が無理を強いるとは限らない。次の事例を見てみよう。

《事例6》

サウエ年齢組のキミルゴ・アラップ・ルート(49歳)は、カップスィオンゴ近隣集団に住む第1妻との間に、12才の娘を頭に6人の子供を持つが、隣のカムゲノ近隣集団に住む若い第2妻との間にはまだ子供がない。彼は評判の働き者で、ヨーロッパ人の農場の賃労働者から始めて、やがてンダナイ・マーケットに店舗を借り、今では幾つかの小さな地所を合計約20エーカー所有する。3エーカー程の土地に自家消費用のトウモロコシとシコクエビを植えているが、彼の収入は製乳工場へ売る牛乳(売りあげ高は年約4,200シリング)、ンダナイの店(純益は年約3,300シリング)、及び牛(同約8,000シリング)に依存している。

彼は早魃に備えてネミアまたはサラーと土地で呼ぶ一見砂糖キビのような背の高い牧草を4エーカー程の土地で栽培している。彼はこの牧草の栽培などのためにカムゲノ近隣集

団の若者や少年を時々賃金雇用していたが、今では中年のルオ人労働者を1人雇っている。彼の場合、家族に頼れる男手がないので、まだ小さい息子達の労働力に依存できる牛牧の方が農耕よりもずっと有利である。

1984年3月現在では、彼が自家に飼養している自分の牛は次の通りである。経産牝牛はカロイ(G/6)、モゴンド(G/9)、ピリルメット(G/6)、タミンギン(H/4)、その他に未經産牝牛(G)、牡牛(G)及び去勢牛(G)がそれぞれ2頭ずつ、仔牛(G)が3頭いる。実はこの時、ルートは同年2月に買った約2エーカーの土地(20,000シリング)の代金の一部にあてるために4頭の経産牝牛(G)を計8,000シリングで売ったばかりだった。

彼はキマナカイとして4頭の経産牝牛(いずれもG/6)を預っている。このうち3頭(アジア、ムルグート及びチェセゲル)は、長年彼と共同でンダナイ・マーケットの店を経営して来た友人で数年前に亡くなったアラップ・ゴスケの未亡人から1983年の乾季に託された。ゴスケは、カップスィオンゴに隣接するアボスィ・サブローケーションのマリゴ近隣集団の住人で、未亡人はルートの同母妹である。1983年の乾季に、彼女の土地では草が枯れ始めていたし、一方ルートは当時も牛を売って0.5エーカー(5,000シリング)の土地を買い取ったばかりで牛乳が不足しがちであった。そこで、アジアとムルグートのキマナガン契約は双方に好都合なものになった。

チェセゲルは、1984年3月に連れて来られたばかりである。この牛のケースは少し異なる。3年程前にルートとゴスケ未亡人が代金を折半してチェセゲルを買った。まずチェセゲルを彼女が引き取り、その最初の牝の仔牛をルートが引き取るようになっていた。ところが、早魃が長引いたために、ルートに手渡されるはずだった仔牛が彼女の土地で死んだ。1984年の早魃は特にひどく、このため牝の小さな仔牛(ルートの取り分)に授乳中のチェセゲル

が仔牛もろともキマナカイとしてルートに託された。

もう1頭のキマナカイである経産牝牛チェブコリルは、1982年にルートが第2妻を娶った時に義父であるカムゲノ近隣集団のカテット・アラップ・チュモに婚資として支払った牛のうちの1頭である。ルートはわざわざ混血西欧種の経産牝牛を支払うことで彼の好意を示したのだった。カテットは、自分の土地の牧草が不足していた訳でもないのに、牛乳の供給源として貴重なはずであるこの牝牛を、なぜかそのまま引き取りに来ず、チェブコリルは自動的にキマナカイとなった。

現在授乳中のアジア及びチェブコリルの仔牛もキマナカイとして預っている。

この事例の場合、義父のチュモは、働き者で、旧保留地側の住人としてはかなり大きな財産を持つ婿であるルートとの姻族関係を強化することを目的として、娘の婚資の眼目であったチェブコリルをそのままルートに対するキマナカイとしたのだ。婚資の支払いは、今日では唯一の婚姻儀礼となったラテット儀礼⁸²⁾の直前に一度に完納するのが理想であるが、往々ごく一部の支払いが2～3年先に延びる。しかし、チュモの場合には、逆にチェブコリルを自動的にキマナカイとすることによってルートの婚資完納を意図的に遅らせようとしている。

同年齢組成員や近隣集団成員の間の結び付きの強いキプシギスの場合、近隣の他民族と比較すると、今日でも組織論上姻族間の政治的同盟関係の重要性は、実質的には——同氏族員間の政治的同盟関係と同じく——相対的に低い⁸³⁾。ところが、チュモは、——姻族関係を媒介にしてキマナガン契約を結ぶというよりは——キマナガン契約を媒介として姻族関係を強化しようと試みているといえる。

ルートが好例となるが、土地と牧草の不足が恒常的要因となっている今日、大きな土地を持ち、牛の管理をよくして社会的な信用を得ている者は、労せずして多くのキマナカイを手に入

れることができる。一般に、平均規模の単婚家庭なら、4頭の混血西欧種の経産牝牛を保有すれば、朝夕2回搾る牛乳のうち夕方の分を売り出すことが可能だといわれる。⁸⁴⁾夕方の搾乳量は朝の約2分の1である。ルートは2人の妻を持つが、まだ子供達が小さく、人数も少ないので、雨季には朝の搾乳全量を KCC (Kenya Co-operative Creameries) に売る。ルートは、キマナカイだけでも経産牝牛を4頭持っている。その4頭が常時同時に乳を出しているわけではないものの、これらの牛だけでも十分牛乳は自給できる。そこでルートは、毎年牛の産乳量が落ち込む乾季に、(特に早魃が予想される場合には、)思い切って自分自身の所有するかなりの牛を売り払い、誰かが手放す土地を小刻みに買い取るという思い切った投機に乗り出すことができる。たとえば、1983-1984年のようにいよいよ早魃がひどくなると牛が痩せる一方トウモロコシが不足するので、牛の値段が暴落しトウモロコシの価格が3～4倍に高騰する。ルートは、いつもそうなるずっと前に自分の牛を売り払う。今日でも、牧草不足がひどくなっても、牛を餓死させたり投げ売りをする位なら屠って家族で食う方がいいと考える老人が往々見かけられる程だから、この地方では、ルートの投機的な牛の操作は異彩を放っているといえる。

ところで、事例6のカテット・チュモや事例3のチェブティオニィが婚資として得た牛をキマナガン契約で他人に預託している事実に着目したい。ペリスティアニィの調査した時代にそのルールがどうであったか彼自身も必ずしも明確に書いていないけれども、元来キマナガン契約の対象となったのは「手に入れた牛」のカテゴリーだけであった。キマナガン契約は家の間や氏族間の政治的同盟関係とは関わりなく、あくまでも個人的な関係に基いて結ばれるものであり、同じ牛でも、家族や氏族同志の政治的同盟関係を媒介する「婚資の牛」や、家族の存続を支える「家の牛」というカテゴリーは、「手に入れた牛」とは異なる原理に基づいて取り扱わねばならない。

牛の上記のカテゴリーのうち「婚資の牛」や「家の牛」までもが今日キマナガン契約の対象となっているのは、著しい放牧地不足が進行した結果であるが、その進行に伴ってキマナガン契約の規則も一部大きな変化を蒙った。1つには、キマナガン契約による牛の移籍が顕示されるようになったことがある。またキマナカイの1頭が必ず預け先に残されるべし（規則8）という重要な原則が、必然性のない寛大な処置へと降格している。このような変化がなければ、カテット・チュモやチェプティオニは「娘と寝た者」と謗られることなしに「婚資の牛」をキマナカイとして預託することは不可能である。後者の変化は、既に事例2にも窺えた。即ち、タニャガンは、父の死後も幾年も父のキマナカイを父の友人であるキメメの息子マルルバイの所に残して父の遺志を尊重したが、一方ではマルルバイの所からキマナカイを全頭引きあげている。

この変化は、必然的にキマナガン契約の短期化と効利的運用への道も開いたのである。旧規則では、残されるべき1頭の牝牛は理論的には永遠に増殖し続けるが、新規則では最後のキマナカイの引きあげが自動的にキマナガン契約の終結を意味する。そして、その時期は、契約当事者の一方が随時発議できるのである。

キマナガン契約による牛の移動の顕示化という変化は、その契約が近隣集団の人々の間で周知の事実になることによって、——動機のある方に従って——預託者か受託者のいずれかにキマナガン契約の締結を契機として社会的な信用や威信を付与する機能を生じさせたといえる。先に見た事例4では、ボイットは古い2つの契約は遠方の人物と、最新のものは極く近い、日常的な対面関係があるともいえる地域の人物との間で結んでいる。キマナガン契約が社会的信用と威信とに直結するようになれば、その締結は狭い地域での方が達成が容易であり、かつ意味の大きいものになるという一面がクローズ・アップされるのは当然の推移であろう。

2. セトゥルメント・スキームのもたらした階層化とその影響

今日でも、事例1、事例2、事例4などに見られたように、家族に供給すべき牛乳を自分の所有する牛だけでは充足できない貧しい者が、比較的豊かな者の牛を借りるという古典的な動機に基づくキマナガン契約も広く行われている。また同じ「牛不足」型でも、事例3や事例5のように去勢牛を犁耕用に借りるというバリエーションも一般化している。

だが、今日では土地不足への対応を動機とするキマナガン契約、いわば「土地不足」型が「牛不足」型以上に重要になっている。後者の場合、預り手が預った牛の生産する牛乳を自由に使える権利を持つばかりでなく、移籍の顕示化によって社会的な信用と威信を増大させることがキマナガン制度の社会的重要性を永続させる有力な副次的機能となっていることが判った。そして、少なくとも私の調査地であるチェパルング地方では、キマナガン制度の構造的変化を支えている基盤として、セトゥルメント・スキームの一応の成功によって、少なくとも土地所有面での階層化が成立している事実を指摘しておく必要がある。

先にも述べた通り、チェパルング地方では、旧キプシギス保留地の1戸当りの土地保有面積は4～5エーカーであり、セトゥルメント地域の約10分の1程度である。旧保留地は常に過放牧状態にあり、乾季に日照りが続くと乳牛の産乳量が著しく減り、仔牛をはじめとして牛が飢えや病気に冒されて死ぬことも珍らしくない。この場合、可能な対処法は、(1)牛を安価で手放すか、(2)屠殺するか、(3)主としてセトゥルメント地域にキマナガン契約によって預託するかのいずれかである。

次にセトゥルメント地域の牛の保有状況を典型的な例に見てみよう。

《事例7》

チェブレルウォ・セトゥルメント・スキームに住むキプランガット・アラップ・ロティッチ（56歳）はチュモ年齢組に属し、第1妻と

の間に10人、第2妻との間に5人の子供をもっている。彼の土地は44エーカーの広さがあり、そのうち7エーカーにトウモロコシを植え、34エーカーを放牧地として用い、残る3エーカーをトウモロコシ畑として他人に賃貸している。

彼の年平均収入は、ほぼ次の通りである。まずトウモロコシのKFA (Kenya Farmers Association) への売り渡し額が34袋分で約4,600 シリング、牛乳のKCCへの売り渡し額が雨季には平均日量5 ガロン、乾季には2 ガロンで平均約 22,000 シリング、1983年からチェプレルウォ・サブロケーションのサブチーフとなったロティッチの給金が年約12,000シリング、それに土地の賃貸料が年約600シリングである。このほかに、子供達の学資が必要になると随時仔牛が売りさばかれるが、その額は年間約2,000~5,000シリングと考えられる。今日でも、牛が家計に占める比重の大きさが窺えよう。

彼が自家で飼養する自分の牛は次の通りである。まず経産牝牛は6頭で、いずれも混血西欧種である——チェセゲル (G/12)、コロイト (G/12)、カロイ (G/8)、チェボイス (G/16)、イースター (G/8)、ティラ (G/12)。したがってその子孫である7頭の未經産牝牛と5頭の仔牛もいずれも混血西欧種である。去勢牛3頭は皆在来種だが、⁸⁵⁾1頭いる牝牛は混血西欧種である。

ロティッチがキマナカイとして預っている経産牝牛はカロイⅡ (H/8)、⁸⁶⁾トウイヤイ (H/8)、ケベイ (H/8) の3頭で、1984年3月現在授乳中のカロイⅡの仔牛1頭と、カロイⅡの産んだ2頭の未經産牝牛及びトウイヤイの未經産牝牛1頭も預っている。

1975年の旱魃がひどくなった時、ロティッチと同氏族員であるアラップ・ロゴイスが5頭の牝牛をキマナカイとしてロティッチに預けた。ロゴイスは、カプケレイ・サブロケーションにあるオルデベス近隣集団(旧保留地)に住んでいるが、当時オルデベス

には雨が来ず、牧草がひどく不足していた。翌年ロゴイスはキマナカイを取り戻したが、伝統に従ってカロイⅡをロティッチの所に残し、感謝と友情の証とした。

トウイヤイは、ロティッチが1976年にチェプレルウォに程近いタキテッチ近隣集団に住む未亡人タプタニ・ネボ・ンゲニに売った牝牛である。だが、タプタニには自家でトウイヤイを飼うだけの余裕は全くなかった。そこで、所有権はタプタニに移ったもののトウイヤイはそのままロティッチの許で飼われた。タプタニは子供達の教育費を得るために、トウイヤイが産んだ仔牛を次々と売り払った。現在トウイヤイは授乳期にないので仔牛は持たず、その子孫では、2歳になる未經産牝牛1頭のみがトウイヤイと共に預けられている。

ケベイのケースは特に注目に値する。まず1971年か1972年頃に、当時未經産牝牛だったケベイをタキテッチのチェルイヨット・アラップ・ボイト (事例4参照) がロティッチにキマナカイとして預けた。ボイトの土地は旧保留地としては広いのだが、当時ボイトには所有する牛が多かったし、丘の頂近くの彼の土地に比べて、川沿いのロティッチの土地の方がずっと牧草と水に恵まれていたからである。

1973年2月にボイトの息子キブランガット・アラップ・チェルイヨットがタキテッチのアラップ・オジュアガの娘アンジュリナを娶った時、ケベイもその婚資の一部としてボイトからオジュアガに支払われた。だが、オジュアガの土地は狭くケベイを収容する余裕が全くないので、オジュアガがロティッチにケベイをそのままキマナカイとして飼養し続けてくれるように依頼して受け入れられた。

それから11年後の1984年2月、故オジュアガの息子ダニエル・アラップ・ミテイがタキテッチのキビロ・アラップ・チェブクオニの娘ジェーン・チェプテルを娶った時、ケベイが婚資の一部として支払われた。だがキ

ビロの土地はトウモロコシ畑と放牧地がそれぞれ2エーカーずつしかなく、キビロはいまだにロティッチの所へケベイを受け取りに行かず、ロティッチも別段それに対して異を唱えなかったで、自然にキマナガン契約が成立した格好になっている。

ロティッチは牝牛(G) 1頭と5頭の去勢牛(いずれもN)を自家で飼養している。去勢牛のうちオルバスとマズィワはキマナカイとして他人から預ったものである。オルバスは、チェブレルウォ・スキームのアラップ・ラボソが1977年に前述のタプタニの娘を第3妻として迎えた時にその婚資の一部として支払われた。タプタニの土地にはオルバスを収容する余力がなかったけれども、タプタニはオルバスをラボソの所に残すことを好まず、人望のあるロティッチに託することを望んでいた。

ラボソの第1妻のメアリーとロティッチの第1妻ソフィアはマタイトコ同志である——即ち、ソフィアの父の父の母(FFM)とメアリーの父の父の母(FFM)が1人の男性の僚妻だった。それ故2人は「(氏族の)姉妹」であり、ラボソとロティッチとの間には、姉妹を娶った男性同志の関係であるレメニ関係が拡大的に適用される。さらに、ラボソとタプタニの間の関係、つまり娘の夫(DH)と妻の母(WM)の間の関係であるボーゲル関係もロティッチとタプタニの間に拡大的に存在するといえる。

牝牛を預かるのとはちがい、去勢牛を預かるのは必ずしも経済的に有利とは限らない。そこでタプタニはロティッチと自分の間柄がボーゲル関係であることを説き、ロティッチに娘の夫としての礼を尽すよう求め、さらに前年1976年にトゥイヤイをめぐるキマナガン関係が既に成立している友人同志であることを力説して、ロティッチにオルバスの受託を依頼した。ロティッチは、当時去勢牛を1、2頭しかもっていなかった事情もあり、受諾した。

マズィワは、ロティッチの第1妻ソフィア

の母方のオジであるゲレゲレ・セトゥルメント・スキームに住むアラップ・チェプクウォニから預っているキマナカイである。1980年にチェプクウォニがソフィアを訪問した折に、ロティッチが犁耕用の去勢牛の不足に悩んでいることを知る。母方のオジ(MB)とオイ・メイ(ZS・ZD)との関係はアブレイまたはママと呼ばれる関係である。なかでも特定のオジとオイまたはメイの間には、個人的に情緒的な強い親和力が見出される。また母方のオジはイニシエーション諸儀礼を初め、諸儀礼で重大な役割を担うことが少なくない。チェプクウォニとソフィアの間にも特別の親和関係がある。チェプクウォニは、ソフィアの幸を願って、ロティッチに4頭の去勢牛をキマナカイとして貸与した。

1983年、チェプクウォニは、ある地所を買い求めるためにキマナカイの去勢牛を売り払う必要ができた。この時まで、ロティッチは、オルバスを初め、チェプクウォニの去勢牛以外に4頭の去勢牛を持つようになったので、4頭揃えてチェプクウォニに返却しても何の不都合もなくなっていた。チェプクウォニにとってもその方が経済的には助かったのだが、キマナガン慣行の伝統を尊重してロティッチの許に1頭残した。ソフィアとその夫に対する自分の厚意を形として示しなかったのである。ロティッチもチェプクウォニに敬意を払い1頭を喜んで預った。⁸⁷⁾

ロティッチは何頭かのキマナカイを他所に持っているが、その詳細は明らかにできなかった。但し、いずれの場合も相手に援助を与えることが動機であって、自分の土地の草不足が原因ではない。

ロティッチの母方平行第1イトコであるマタヤはケリチョ・ディストリクトの中央部ブレティ・ディヴィジョン南部のカブカテットに住んでいたが、1975年にディストリクトの北部キプケリオン・ディヴィジョン最北端のロンディアニィ辺りに土地を新たに買って、そこで第2妻を迎えた。マタヤは、彼の第2

妻の将来の子供達の福祉のためにとロティッチに未經産牝牛（G）を借り受けるキマナガン契約を申し入れ、ケベイⅢ（G）を与えられた。今ではケベイⅢには幾頭かの子孫がいるはずだが、ロティッチは全頭を預けたままにしている。

ロティッチは、彼の母の3男だが、4男である末弟ジェームズに何頭かのキマナカイを与えている。ジェームズは、1967年に結婚し、その時に父の遺産を全て婚資として支払ってしまったので、ロティッチがジェームズの新世帯に援助したのである。その後、ロティッチがジェームズの所に預けたキマナカイを取り戻したり売り払った形跡は見当たらない。

事例7には沢山の注目すべき点がある。第1には、事例6と同様広い土地を持つ者が、キマナカイとして乞われて預っている乳牛の産出する牛乳から大きな利益を得ていることである。ロティッチは7エーカーのトウモロコシ畑を作っているが、これはスキームでもかなり広い方である。キプシギスの農業は——とくにチェパルング地方では——非企業的な自給天水農耕という性格が著しく、ほとんど自家労働に依存しているので、スキーム側でもトウモロコシ畑の面積は1戸平均3～4エーカーであり、旧保留地側とそれ程変らない規模となっている。

ロティッチでさえ先に数字を具体的に挙げておいた通り、農業よりもむしろ牧畜に大きく収入を依存している。牛牧にかかる手間は、余程規模が大きくなり限り、牛群の大きさにそれ程影響されない。したがって、広い土地を持つ者にとっては、^{*}牝牛をキマナカイとして受託することには大きな利点がある。

ロティッチの土地は、広さが事例6のキミルゴ・アラップ・ルートの土地の2倍以上もあり、地味も一層豊かなので、ルート以上に牧草には余裕がある。彼は他人の牛を喜んで受け入れる一方で、他人を経済的に援助するために多くの牛をキマナカイとして貸与している。今日のキマナガン契約では牛の移動が顕示的になってい

るので、ロティッチはこの2方向のキマナガン契約の多面化を通じて社会的な信用と威信を増大したのである。⁸⁸⁾このことは、最近ロティッチがチェプレルウォ・サブロケーションのサブチームに選ばれた事実と無関係ではあるまい。

第2に、ケベイの例が興味深い。まだ未經産牝牛であった1971年か1972年にボイトがロティッチにキマナカイとして預けて以来、ケベイは2度婚資として用いられ、所有者が3人変わったにもかかわらず、一貫してロティッチの所でキマナカイとして飼養されて来た。「ウシは、3～4歳で初産し、そのあと10年間出産し続ける」（佐藤、1984：62）から、ケベイはもうほとんど産乳期の終りに近づいている。つまり、ケベイの牛乳はロティッチが全て利用したことになる。この例には、牝牛の所有者の推移に左右されることのない、キマナガン制度をめぐる旧保留地の人々とスキームの人々との間の構造的な社会関係が読み取れる。

では、牝牛の貸与者である旧保留地側の人々にはどのような利点があるのだろうか。タプタニイはトゥイヤイをロティッチから買い、そのままキマナカイとしてロティッチに託した。トゥイヤイの場合も、ケベイの例と同様、生まれた仔牛は次々と売り払われている。タプタニイはその売り上げを子供達の学資に充て、長く患って死んだオジュアガは病院での治療費や病院へ通う交通費に充てた。先に述べた通り、少なくともチェパルング地方では、トウモロコシ栽培が全面的に天水に依存する粗放で不安定な自給農業である以上、現金収入は牧畜に依存しなければならない。しかし、一般の人々には多くの牛を飼う土地がない。そこで、ルートやロティッチのような、大きな土地を持ち牛の面倒をよくみる信用のおける人物に牝牛を預けておけば、毎年その牝牛が産む仔牛を売ってほぼ確実に現金収入を得ることができる有利な利殖ともなるキマナガン契約が大いに魅力的なものになってくる。また、先に見た慣行あるいは規則の変化によって、いわば「利子」（子孫）ばかりでなく「元金」（親牛）も必要に応じて何時でも自

由に引きおろせるようになったために、牛の社会的な交換価値に基づく3つの分類にかかわりなく、どんなカテゴリーの牛もキマナガン契約の対象にできるようになった。この変化が、いわば「庶民の銀行」という属性をキマナガン慣行に付与したといえる。この事実こそが、ケベイの例に典型的に現れていたような、旧保地側の人々とセトルメント・スキーム側の人々との間の構造的な社会関係を背後から支えているのである。

今これ以上多数の事例を挙げる余裕はないが、少くともソダナイ・ロケーションやアボシ・ロケーションでは今述べたような、土地保有の面での階層化がもたらした構造的な社会関係が近年強化されている。チェプレルウォ・セトルメント・スキームは、グシイ人の居住地であるニャンザ州、キシイ・ディストリクトのエケルボ・ソサエティと境を接している。エケルボは雨に恵まれた豊かな土地である。1981年までは、同ソサエティの土地はグシイ人入植者の間で分割されずに共同で管理されていた。そこで、キブシギスの人々、とくに土地不足に悩む旧保留地の人々は、早魃になると草の豊かなエケルボ・ソサエティに自分達の牛を追って行って放牧した。歴史的に見ると、パックス・ブリタニカが両民族の戦闘を鎮静させるまで、牛牧民キブシギスが常に農耕民グシイの略奪者であり続けた。

それ故、グシイの人々は上記の不当な侵入に対しても、キブシギスを恐れ、取り立てて異を唱えず黙認していた。だが1981年以来このキブシギスの「フロンティア」が失われたので、旧保留地の人々のセトルメント地域の人々に対する放牧地の依存が不可避なものになったのである。

3. キマナガン制度と女性、教会、若者

マナーズはほとんど触れていないけれども、キブシギスが植民地経済に巻き込まれて行く過程で生じた社会的変化の最も重要な側面の1つは、女性が、伝統的に完全に閉ざされていた政

治や経済の分野に次第に参入して行ったことである（小馬、1982、Komma, 1984）。

女性は、男性に従属し独自の財産は一切持たないものと考えられ、男同志の友情に支えられた制度であるキマナガンに関わることも厳格に禁じられてきた。ペリスティアニィは、「女は男の敵」と題する次のような「神話」を収録している（Peristiany, 1939: 248 - 249）。⁸⁹⁾

ある時、豊かな男が妻を娶った。この男はキマナガン契約に則って沢山の山羊／羊を他の人々に預けていた。ところが、ある時預託している牝牛が乳を出し続けているのに、この男の牛囲いの中の牝牛の乳が一斉に止ってしまった。飢えがつのり、子供達は空きっ腹を抱えて泣き叫んだ。妻は夫から、他所に夫の牛が預けられていることを聞かされていたので、こう言った。「何某の所から牛を連れ戻り、誰その所から山羊／羊を取り戻しましょうよ。このままでは子供達が飢え死ぬのを待つばかりですもの」。夫は答えた。「お前は、彼等が子供達のためにあの家畜達から乳を搾っていないとでもいうのかい」。

ある日、夫が留守の間に、妻が預けてあった山羊（羊）を1頭連れ帰った。夫は家に戻ると（それに気付いて）尋ねた。「どうしてお前は、私の許しもなく、あの山羊（羊）を連れ戻したのだ」。妻は答えた。「私達の子供達は どうするつもりなの。あの子達が飢え死にしそうもないというの」。

さて、こんな諺がある——「女には決してキマナガン契約下の牛や山羊／羊について教えてはならない。たとえ第1妻であろうと、娘であろうと喋ってはならない。息子にだったら喋ってもよかろう。全ては（結局）彼のものなのだから。だが、全ての女は、今日に到るまで男の敵だ」。

この物語りでは、母親の子供達への慈しみと男達との篤い友情とが美事に対照され、その深刻な葛藤が描き出されている。ここで強調さ

れているのは、キマナガン制度を媒介とする民族の団結と統合が、家や子供の存続という社会構成上の根本原理にすら時として優先する社会的な要請であるということである。だが、女性にはそれが少しも理解できず、子供や家にひたすら妄執して、往々社会の統合や団結を脅しかねない。また、女性は牛と交換される存在であっても、決してその所有者ではあり得ず、それ故キマナガン契約の秘密が彼女達に明かされてはならないと考えられたのである。

ところが、今日では、経済活動に進出した女性達は、秘かに自分達の牛を所有し、それをキマナカイとして夫の目から隠すようになっている。今、1例を引こう。

《事例8》

チェプレルウォ・セトゥルメントのチェブカルワル近隣集団に住むエスタ・ネボ・トウェット(49歳)は、小学校教員であるエリジャ・アラップ・トウェットの第1妻である。夫は、1973年に、チェブカルワルから直線距離でも約35キロメートル離れたソト・ディヴィジョンのロンギサの近くに、新たに土地を買い、第2妻を迎えた。彼はそれ以来ごく稀にしかチェブカルワルにやって来ないばかりでなく、酒好きの彼は、チェブカルワルで飼っていた自分の牛を皆酒代に変えてしまった。28エーカーの土地に現在エスタが飼養している自家の牛は全て彼女が自分自身の才覚で手に入れたものである。

経産牛は、カロイ(H/4)、ビルルメット(G/6)、トゥイメット(H/4)の3頭の自分の牛の他に、ケベイ(N/3)をキマナカイとして預っている。1982年、彼女の3女が中学校(フォーム1)に入学することになり、その学資の一部として2歳になったばかりの未經産牝牛を売りさばきたいと思った。だが、この牝牛は売るには幼な過ぎるので、エリジャの若い第2妻の母で、近くのンダナイ近隣集団に住む未亡人であるネボ・レルゴの在来種の去勢牛とまず交換し、この去勢牛を売った。丁度旱魃が一番ひどい時であっ

たし、ネボ・レルゴの土地が広さ3エーカー足らずと狭いために、ケベイはそのままキマナカイとしてエスタに預けられて現在に到っている。

エスタは、チェプトゥイコン(N)、モコンド(H)、チェスイティエン(H)、ビルルメットII(H)という4頭の未經産牝牛をキマナカイとして預っているが、自分の未經産牝牛は手もとに持っていない。暫く経てば、この4頭も乳を出し始めるはずである。

チェプトゥイコンは、土地不足に悩むネボ・レルゴが1983年の旱魃時に、エリジャのロンギサの土地へキマナカイに出したものである。エリジャの妻である娘の将来の福祉も同時に目的としていた。ところが、ロンギサでも日照りがいよいよひどくなり結局土地の広いエスタの所へキマナカイとして預け直された。

モコンドとチェスイティエンの事例は大変興味深い。エスタは1983年に、娘達の学資を得るために、この2頭をカプケレイ近郊に住むルシー・ネボ・チェランガットに売った。ルシーはエスタにとって、母方交差第1イトコに当る。ルシーの夫のアラップ・チェランガットの土地は十分に広く、2頭を余分に飼うだけの余裕はあった。しかし、ルシーは2頭を夫の牛群の中で飼うことを望んでいなかった。夫は酒飲みでも浪費家でもないけれども、彼女がまさかの時にも子供達に十分な教育を施してやるために、自分自身の自由になる財産を確保しておきたいと考えたからである。

ルシーは、自分で毛糸のセーターを機械編みして、マサイ地区のマーケットの日にそれを売って小金をため、その利益でこの2頭を買い取った。

エスタは1980年暮にンダナイ・サブローケーションのモティレット近隣集団に住む若いポール・アラップ・ランガットにビルルメットIIを売った。ランガットはエスタの属するプロテスタントの1派AGC(African Gospel Church)のメンバーである。当時ランガットの土地は2エーカー程と狭かったが、

彼は1982年にナクル・ディストリクトのモロに近いングルウォニに大きな土地を手に入れたので何時でもビルルメットⅡを引き取れるはずであるが、今のところその様子はない。

エスタは4頭の子牛（いずれもN）を自家で飼養している。このうち1頭だけが彼女のもので、他の3頭は、犁耕の必要から、1981年に実父、実母、実弟から1頭ずつ借り受けた。ちなみに、両親から借りた2頭はチェプカルワルから直線距離で約40キロメートル離れたソト・ディヴィジョンのレイティッチ近隣集団から連れて来られたものである。

エスタ自身、2頭の経産牝牛を他人にキマナカイとして預けている。彼女は、進取の気性に富み、1970年に毛糸編機を買ってングナイ・マーケットでセーターを売り始めたが、彼女はこの地域で最初にこの商いを始めた人物である。その利益で1973年にティレガット（N）を買った。彼女はすぐにティレガットをキプケリオン・ディヴィジョンのキレンゲットに住む異母兄ペーター・アラップ・ビルルの許へ秘かに送り出した。現在、ティレガットと共にその子孫の3頭の未經産牝牛と2頭の仔牛がビルルの許と一緒に預けられている。なお、毛糸編機は、娘の学資を得るために、余儀なく1974年に手放した。

彼女は、その後ングナイ周辺でシコクビエ買い集め、キスムなどの都市へ持って行って売った。この商いの利益の一部で1982年に経産牝牛ビルルメットⅢ（H）を買った。彼女は、この牝牛を故郷レイティッチに近いカボソンに住む幼な友達である女性ルシー・ネボ・キレレに、その仔牛1頭と共に預けている。

事例8に類似する例を、少なくとも、私はあと2例知っている。いずれも酒好きな夫の目を逃れて妻がキマナガン契約によって、自分の将来を託する子供達の教育費を確保しようと試みている事例である。キプシギスには、(1)土地不足が生じるまでは結婚後の新居制が一般的であり、(2)氏族や親族が地域に集中せず、全土に拡

散して住み、(3)1人の男性の複数の妻達も互いに地理的に遠く隔って自分の世帯を営み、(4)夫は複数の妻達に対して必ずしも経済的、性的な平等を保証しなくてもよいなど、男性と女性との間の潜在的な葛藤を拡大し得る社会構造上の特徴があり、今日では両性の亀裂が教育費の支出をめぐる夫婦の対立という形で顕在化しやすいこと、さらにはそれが今日の女性達の経済領域への旺盛な進出や女性自助組合運動と密接に関わり合っていることを⁹⁰⁾私は既に別の論文で示摘しておいた（Komma, 1984: 170 - 171）。

この事例8でも、女性が商業活動などに進出したことが女性にとってもキマナガン制度を意味のないものにせず、彼女達がむしろ積極的に、従来参入を禁じられてきたこの制度に関与して「庶民の銀行」として活用するばかりでなく、女性相互のキマナガン契約のネットワークを作りあげつつあることに注目しなければならない。

さらに付け加えれば、鶏はヨーロッパ人との接触後暫くしてから導入されたが、女性達は、今では広く鶏のキマナガンのネットワークを張りめぐらしている。ここで詳述する余裕はないが、このシステムは牛の場合とは幾分異なっており、預った鶏の飼育者が鶏羽かひの返礼として貰うことによって、全ての女性が鶏を持てるような仕組みになっている。

もう1つ注目してよい現象は、事例8でも窺えるように、女性のキマナガン制度への参入がキリスト教各派の支持を受け、男性信徒が女性達に支援を与えていることである。同時にどの派も青年層と結びついて、年齢組＝年齢階梯複合体系に基づく伝統的なジェロントクラシー社会において、彼等の政治的、経済的な地位の向上に支援を与えている。キリスト教各派のこの2つの動きが、女性と若者の連携の機会を提供しているのである。

1983年にはングナイ・ロケーションで、カソリックの信徒団体が劇的な社会変動の端緒を開いた。同年ングナイ・カソリック教会信徒団は、——土造りで草屋根葺きの粗末なものだが——ングナイ小学校に身体障害者用の寄宿舎を建て

るための基金15,000シリングを寄付した。身体に障害のある生徒には通学は困難が多く、また昼食のために遠方の自宅へ往復することは不可能であるので、この措置は待望されて来た。

この事業を挺子として、同信徒団はンダナイ小学校の3名の若い男性信徒を新たに運営委員として送り込んだので、以後同小学校の運営委員は都合7名で構成されることになった。従来の同委員には、通学校区内の8つの近隣集団に各2名ずついる「村の長老」16名のうちでも人望のある者4名が選ばれることになっていた程の重職である。ところが同信徒団が送り込んだ3名の委員は、36歳、34歳、30歳と若い⁹¹⁾。これは、あえて若者を選んだからではなく、チェパルング地方では新しく参入した宗派であるカソリックは特に年長男性の被洗礼信徒が少なく、彼等が最年長層に属するためである。このうち34歳の男性は同委員に選ばれたことによって、それからしばらくして彼の居住地がカガシック近隣集団から独立してコンダメト近隣集団となった時に、自動的に次席「村の長老」に選出された。小学校の運営委員が「村の長老」を兼任するのが慣行となっているからである。また、この3名の委員には入っていないが、信徒団の聖歌隊長を勤める28歳の若者が、1983年にタキテッチ近隣集団の首席「村の長老」が没した後、次席「村の長老」に就任した。これら一連の出来事は、長く社会を支配してきた老人の権威に対する女性＝教会＝若者の成功裡の造反であったといえる。

同信徒団の団長がジョアンナ・アラップ・ルート(35歳)であるが、彼はンダナイ小学校の運営委員にはなっていない。彼はンダナイ・サブロケーションのキプテンデン近隣集団(旧保留地側)の首席「村の長老」であり雄弁で鳴る、チュモ年齢組のキブルート・アラップ・キムヤビーの2男である。ジョアンナは、ンダナイ・マーケットで1軒店を構え、日刊誌『ネーション』の西チェパルング地区の取り次ぎ店も最近始め、成功をおさめている。彼は、1983年にマナレット・サブロケーションのカイテットに約

7エーカーの土地を自前で買い、今では毎日ンダナイまで通って来る。この土地の購入のため、現在は牛の保有頭数が減ってしまった。彼のキマナガン契約を追ってみよう。

《事例9》

現在自家で飼養している経産牝牛は、トゥイヤイ(H/2)、スィマティヤイ(N/1)、スィムボル(H/3)の3頭だが、スィムボルは父親のキムヤビーから1983年の日照りの時に預ったキマナカイである。他には未經産牝牛が2頭いる。牡牛と去勢牛はいない。

貸し出しているキマナカイは、ケロイ(G/6)とケベイ(N/1)の2頭である。ケロイは1984年初めに、キムヤビーがジョアンナの幼い異母兄弟のためにと借りていったものである。ケベイは、1983年にキムヤビーのスィムボルを受け入れた時に、そのために自家で飼えなくなって、キプテンデンに住む親しい同年齢組の友人であるコロングロ年齢組のオーグスティン・アラップ・ソイ(35歳)に預かって貰った。ソイの土地は14エーカーある。

ここで注目してよいのは、かつては自分の死の直前まで一元的に自家の牛を支配していた父親が、キムヤビーの例では、経済的に成功している息子にすり寄って行き、息子との間でキマナガン契約を成立させている事実であろう。息子ジョアンナは、父親キムヤビーの牛を引き取るために、わざわざ自分の牛をキマナカイとして友人に引き受けて貰っている。キムヤビーは、1984年に幼い子供に与える牛乳が足りなくなると、ジョアンナに預けたスィムボルを取り戻すことはせずその代りに、その2倍も牛乳を生産するケロイを息子からキマナカイとして借りうけるという巧妙さである。こうすることによって多くの牛乳を利用できるばかりでなく、頼りになる息子であるジョアンナとのキマナガン契約を双方向的なものへと強化できるのである。

ジョアンナは、小学校にさえやって貰えなかったが、商いの成功で得た信用と温厚で誠実な人

柄による信望とで地歩を固めつつある。彼は、そのメンバーがカソリック信徒と非キリスト教徒から成るタキテッチ女性自助組合の積み立て金から、月々100シリングの利息を払うという条件で1984年7月に3,000シリングを借り受けることに成功し、事業拡大のための財源として活用している。両者の契約を仲介したのが、熱心なカソリック信徒で私の助手を長く勤めてくれているタキテッチのフィリップ・アラップ・ルート（29歳）である。彼の妻がタキテッチ女性自助組合の書記であるばかりでなく、彼の一族から同組合の中心メンバーを出している（小馬, 1982b: 12-16, Komma, 1984: 176-182）。ジョアンナのような小商人が銀行から融資を受けることが全く不可能である以上、多少利息が高いものの、この契約は彼にとって大変都合のいいものであると言える。両者はローンの拡大を検討中である。

以上の事実から、少なくともンダナイ・ロケーションでは、キリスト教信徒団の組織を媒介として若者と女性とが連帯して、老人男性に独占されてきた伝統的な権威を徐々にではあるが、しかし確実に突き崩しつつあることが窺われるはずである。

この場合にも、若年層が経済力や政治力を持ち始めている事実がキマナガン契約を衰退の方向へ向わせず、キリスト教各派の信徒である男女の間や、父子の間にキマナガン契約を成立させるなど、同契約の新たなバリエーションを派生させながらキマナガン契約を新たな状況に適應させる内的発展へ向かわせるように作用していることに着目しておかなければならない。

V 結 論

本稿の結論を予め手短かに要約すると、東アフリカのいわゆる「牛複合」社会が植民地化後の近代化に首尾よく適應した典型的な例と考えられてきたキプシギス社会においても、牛は決して単なる商品の1つとなってしまったのではないということである。

確かにキプシギスの古典的な「牛複合」は近代化の過程で大きな変化を蒙った。なかでも、牛と自分とを何がしか同一視するような、牛の審美的な価値に纏わる文化的側面はかなり弱められたといえる。

他方、婚資や血償として用いられ、家族や氏族の間の政治的連帯の達成や修復の媒体となる牛の社会的機能は、必ずしも大幅に後退してしまっただけとはいえない。またイニシエーション諸儀礼を始めとする諸儀礼や世界観に占める牛の儀礼的価値は相変わらず、中心的な重要性をもっている。

本稿の考察の中心的対象であるキマナガン＝キマナクタと呼ばれる個人間の牛の貸借制度は、植民地化から、犁の導入、土地の囲い込みと私有化、ケニアの独立、旧ヨーロッパ人入植地へのキプシギスの再入植に伴う階層分化へと到る一連のドラスティックな社会変容の過程で、諸々の側面で多様な変化を遂げてきた。しかしながら、この制度自体はすたれることなく、むしろ現金経済が新たにもたらす様々な動機に対応する様々なバリエーションを適宜派生させながら、個人をベースとした長期・短期の牛の貸借関係の緻密なネットワークを民族全体に張りめぐらし、成員間の経済的不平等を極小化して民族の同一性と団結を維持するという終始一貫した機能を担い続けてきたと考えられる。

かつて、非分節的な無頭制の社会であるキプシギス社会では、年齢組＝年齢階梯複合体系やそれと連動する軍団の組織が全民族を横断して組織され、民族としての同一性や忠誠や団結の中核となっていた。だが、これらの組織がパックス・ブリタニカ以降著しく衰退して実質的機能を果さなくなり、イニシエーション諸儀礼がほとんど「成人式」以上の意味を持たなくなったことを考え併せれば、ケニアという新しい国民国家の中のキプシギス社会でキマナガン＝キマナクタ制度が、今日、キプシギスの民族としての自己同一性の確認と団結とに果している機能を過小視することはできない。

マナーズは、キプシギスの「牛への傾注の起

源と（ヨーロッパ人との接触の）初期における牛への傾注の保持との合理的な淵源を、まさしく（現今の）牛への傾注の衰退の中にはっきりと探し出せる」（KK：236）と考え、それは、当時は「牛がキプシギスの生存のための第1の手段だったからだ」（同上）と述べている。また、伝統的なキマナガン制度について、彼は、「牛の所有の大きな不平等は常に普く存在してきた。*kimanagen* (sic.) は、ほとんどまたは全く自分の牛を持たない者がもっと豊かな友人、親族、あるいは同年齢組員から牛を無期限のローンとして手に入ることを通常保証するものであるが、*kimanagen* (sic.) の持つこのような部族内部での埋め合せのメカニズムが無かったならば、牛所有の不平等が社会を分裂させていただろう」（LU：494）との評価を与えている。

だが、マナーズのキマナガン制度に対するこうした評価はあくまでもヨーロッパ人との接触の初期までについてのものであって、それ以後の同制度のあり方や評価は全くといっていい程なされていない。彼は、「生存のための第1の手段」としての重要性がトウモロコシや茶を初めとする農作物にとって代られてゆくにつれて、牛が単なる1商品として実利的に扱われるようになったことを強調しており、それ故に自動的にキマナガン制度も考察に値する意味を失ったと考えているかのように感じられる。だが私はカップティッチ制度の事例を引用しながら、土地囲い込み運動の最中でも、契約締結の動機を急激に変化させながらキマナガン制度が内的発展を遂げたであろうことを推察した。それ以降については、同制度が如何に巧妙に現金経済の生み出したニーズを動機に組み込みながら内的発展を見せたかを、幾つかの事例を示しながら、実証的に論じた。

今日でも、キプシギスの社会生活の基盤は、独自の裁判機構を持ち、日常生活における基本的な枠組となっている近隣集団にある。他の論文（小馬、前書、Komma, 1984）で詳しく論じたことであるが、近隣集団の農事を主とする労働交換や相互扶助は在来のビールの交換を媒介

として行われる。また、かつて農耕は標高の高いモソップ地域に位置した近隣集団内で女性によって営まれていたのに対して、戦士達の牛牧キャンプが設営された標高の低いソイン地域は各近隣集団の枠組をこえて、民族全体に開かれていた地域であった。いわば小宇宙である近隣集団内部での社会交換の媒体であるビールに対して、大宇宙であるキプシギス社会全体の社会交換は牛を媒介としてなされるのである。⁹²⁾

それ故、しばしば小宇宙たる近隣集団はビールまたはビール壺で象徴され、一方大宇宙たるキプシギス社会全体は牛乳で象徴されている。たとえば、キプシギスには超人的な力に働きかけて相手に不幸をもたらすことによって自己の正当性を証明することを目的とする、呪詛と宣誓と妖術が複合したようなムメック (*mu-mek*) またはムマ(*muma*)と呼ばれる行為が知られ、今でもよく発動されている。このムメックの効果を取り除く浄化儀礼では、仕掛けに用いられた物自体とそれが置かれた地点の双方に、ビールと牛乳が必ず注がれ、それによって近隣集団とキプシギスの全体社会の双方が浄化されなければならない。

私は、今日でもキマナガン制度が、キプシギス社会全体の個人的な関係を緻密で複雑なネットワークに織り上げているばかりでなく、土地の私有化や資本経済の進展に伴ってますます拡大した個人間の経済的不平等とそれに対する不満の増大を極小化する機能を持っていると考える。この意味で、マナーズが伝統的なキマナガン制度の社会的機能と考えた、牛の所有に纏わる不平等の極小化とそれによる民族の団結の維持という機能は、彼が論証しようとしたのとは逆に、近代化の過程で失われるどころか十分に維持されている。今では単なる牛の所有に関する不平等の中和作用をこえて、資本主義経済がもたらした様々な経済的不平等の極小化へとキマナガン制度のこの機能そのものが内的発展を遂げていると考えるべきである。

《 注 》

- 1) *kimanakta* または *kamanaktaet* は家畜を他人に貸与することであり、一方 *kimanagan* は他人から家畜を借り受けることであって、1つの制度の表裏2面である。いずれの語も広く一般的に用いられる。なお、貸された家畜も借りられた家畜も共に *kimanakai* と呼ばれる。最初にキブシギスのこの制度を記述した Peristiany (1939) ばかりでなく、Manners (1962, 1964, 1967) も Saltman (1977) も *kimanagan* (または *kimagan*) という語しか用いていない。しかもその語義は、一様に「牛(家畜)の貸し出し」とされている。この事実に注意を喚起したうえで、私もこの論稿では、以下にキマナガンの語を用いてこの制度を記述する。
- 2) キブシギス社会での牛の価値の変遷をこの側面に限って論じるとしても、牛が婚資や血償として用いられる慣行の変化に触れなければならないのは当然である。婚資の変化については、西チェパルング・ロケーションの4つの近隣集団で全戸調査を実施したのを初め、数百の事例を収集したが、ここではテーマをキマナガン制度に絞る必要上、その資料への言及を避けた。
- 3) この論稿は、筆者自身が行なった現地調査(1979年7月～1980年3月, 1981年7月～1982年1月, 1983年11月～1984年3月, 1984年7月～同10月)に基づいている。なお、最初の2回の調査は、一橋大学が文部省の科学研究費補助金を得て行なった「環ヴィクトリア湖地域のエスノヒストリー手法による総合社会調査」(第2次および第3次調査・研究代表・長島信弘一橋大学教授)の一環として行ない、あとの2回の調査は私が単独で実施したものである。
- 4) 但し、キマナガン契約に纏わる紛争についての数多い事例についてはここでは敢えて触れない。Saltman (同上:35)の述べる通り、キマナガンは、略奪して来た牛の分配、婚資の支払いなどと共に、キブシギスの人々の間の紛争の最大の原因の1つである。この側面も別の調稿で検討する予定である。
- 5) グリーンバーグの分類では南ナイル語に当る。
- 6) キブシギスの「神話」と歴史伝承は共に、原カレンジン——キブシギスは彼等をミオット (*Miot*)

と呼ぶ——はバリngo湖の周辺でマサイから牛を奪って牛牧民になったと伝えている。

- 7) 因みに、1920年の人口は71,091人 (Barton, 1923:45)であるが、ナンディなど (Huntingford, 1963:40)の例からみて、ヨーロッパ人に屈服した1905年から1920年までの10数年間に人口がほぼ2倍になっていたものと考えられる。
- 8) 牝牛は年老いて歯の抜けたもの以外は犠牲獣として用いない。
- 9) Manners (1964:25)は、両大戦間に、氏族が血償に責任を持つ制度は「完全に消滅したと思われる」とするが、全く誤っている。
- 10) キブシギス語には、山羊 (sg. *ng' ororiet*, pl. *ng' ororik*) 羊 (sg. *gechiriet*, pl. *gechirek*) の他に、山羊または羊 (sg. *artet*, pl. *nego*) という概念があり、頻繁に使用される。
- 11) 家畜と等置されている現金の額は、物価の現勢からすれば不当に小さい。また、牛1頭対山羊/羊1頭の価値の比は、それに対置される現金の比(2対1)とは全く釣り合わない。この経済的視点からは完全に不合理な慣行には、成立時の歴史的条件もあろうが、別の意味づけがされていると考えなければならない。すなわちこの慣行から、血償の支払いが氏族の団結という価値の(ほとんど唯一の)確認の契機になっている故に、それが特別の意義をもっていることが判る。なお、1986年1月現在、1ケニアシリングは約13円である。
- 12) キブシギスでは、昔から直接の家族を超えた親族は、婚資の支払いに関与しない。
- 13) 私自身の調査では、同じカレンジン語系諸民族でも、ケイヨでは早くから婚資が品物や現金に置き換えられ、今日では——婚資が毛布2～3枚ということすら珍らしくなく——形骸化している。後に述べるように、婚資として支払われた家畜は娘の同腹の兄弟達が自分達の婚資として用いるべきものである。ところが、婚資が品物や現金で支払われると、婚資は往々雲散霧消してしまう。キブシギスは、このことを、今日でも婚資が家畜で支払われなければならない理由の第1のものとして挙げる。
- 14) 小馬 1983a, 37頁の母方のオジを讃える詩を1例として参照されたい。
- 15) キブシギスとナンディは、イデオロギーの上で、

互いに「我々はひとつ」と考えている。今日でも民族的アイデンティティ形成の最大の契機であるイニシエーション諸儀礼は、どちらの民族でも、原則として他民族には完全に秘匿にされている。しかし、歴史的に、もし自民族内で便宜が得られない場合、キプシギスはナンディで、ナンディはキプシギスでイニシエイトされて来た。

ナンディは、同じカレンジン語系民族も容赦無く略奪したが、キプシギスとはたった一度も戦っていない。他方、キプシギスが他のカレンジン語系民族とは一度も戦っていないとする定説は正しくない。これまで全く報告されていないが、私自身の調査では、キプシギスはウアシンギチュを自称するトゥゲン系の民族を攻撃している。彼等は植民地化後トゥゲンのレンブース・セクションから出てナロック・ディストリクトのマサングレへ移住し、マサイの間に住む人口約2,000人の小集団である。従って、キプシギスにとってもナンディは全く例外的な民族なのである。

ベリスティアニはキプシギスランドの最北部で調査をしたが、そこはナンディとキプシギスの混住地であった。彼の記述には所々ナンディとキプシギスの混同が見られる。たとえば、彼自身が挙げている両民族の家の区別の仕方自体(Peristiany, 同上: 155) が誤っている程だ(Komma, 1981: 98)。

両民族の人口が大きくなったので、今日では両民族を横断する同氏族成員間の民族を超えた血償支払い協力は稀になってきている。だが、私の調査中にも、ケリチョ・ディストリクトの最南端に住むキプケスワエック氏族のインフォマントの家までナンディの同氏族成員が血償支払いの分担を求めてはるばる訪れて来たことがあった。

- 16) 但し、予言者を政治的な核として、いわゆる「ナンディ戦争」と呼ばれる対ヨーロッパ人抗争を戦ったナンディの方が、1940年代でも多少とも保守的であったと考えるべきかも知れない。(cf. Ellis, 1976; Matson, 1970, 1972a, 1972b; Ng'eny, 1970; Magut, 1961; Chirchir-Chuma, 1975; Gold, 1978)
- 17) 多くの民族で、複数の妻の間の嫉妬が妖術の原因と考えられているのは周知のところである。
- 18) 以下では、Manners, 1967をKKと略記する。

- 19) 因みに、1950年代末から土地の不足によって、結婚後の父方居住制とそれに伴う土地の細分化の傾向が徐々に強まった。
- 20) 正しくは *kimanagan* ではなく *kimanakai* であることは既に述べた(注1)通り。
- 21) 炭疽熱の恐ろしさが広く認識されるようになる極く最近までは、可能な限り死獣の肉も返還するか、あるいは預託者を呼び寄せて死獣を共食することが義務であった。
- 22) キプシギスは慣習法に従って、今日でも、財産を——各妻の子供の数にかかわらず——妻達の間で等分する。今日では、トウモロコシ畑を生前に息子に分与することは必ずしも反対されないが、牛だけは決して分与しない。それは父親の死を意味するとされる。父親は臨終の直前に初めて息子達を呼び集め、キマナガン契約の内容を教え、財産の分与法を指示する。
- 23) 牛泥棒は、妖術の行使と共に、最も重い罪であり、再犯者は近隣集団の人々によって死刑に処せられた。今では死刑の代りに集会的な呪詛を受ける。そうなれば、まず疑いなく1年以内に死ぬ。
- 24) ロバは忌嫌われ、かつてはその死骸が見つかるとその地点から数キロメートル以内に住む人々がその土地を捨てて他所に移住した程である。だがロバまで食い尽したり(「ロバの飢饉」)、あらゆる皮製品を食い尽した(「皮の飢饉」)経験などがそれぞれの飢饉名につけられている。
- 25) キプシギスは「火」(*mat*)を人体内や家屋内、それに氏族や年齢組内に存続する永遠の生命原理と考えているので、屋内の炉の火が夜間も消えないように「長大な薪」(*subenet, suben*)を焚く。山羊/羊の牝や、息子のない老女が嗣男子を得るために嫁がせないまま家に残す娘も同じ名(*subendo, suben*)で呼ばれる(Komma, 1981)。
- 26) 但し、マナーズ(KK: 226)は、Orchardson(1937)を引いて、羊の乳牛も用いられたとする。
- 27) 今日でも事情は変わらない。
- 28) 他の点では、牛に関する先の規則と同じである。
- 29) 山羊/羊(「貧者の牛」)の糞は、先述した牛の糞と同じ儀礼的価値を持っている。
- 30) 注1を参照せよ。
- 31) 1930年代後半の交換レートは次の通りである(Peristiany, 1939: 154, note 1)。未經産牝牛

- 1頭=山羊/羊14頭=牝牛1~2頭;妊娠中の牝牛1頭=山羊/羊20頭=牝牛2頭;仔牛に授乳中の牝牛1頭=山羊/羊30頭=牝牛4頭;牝牛1頭=山羊/羊8~9頭。
- 32) *kipser* (が正しい) —— 離乳のために仔牛に付ける器具の意。だが、ペリスティアニイのいうような傷のことではない。
- 33) 正しくはキマナカイ。注1参照。
- 34) 即ち *chito neo*。直訳すればビッグ・マンだが、*neo* とは大きなものを差す極く一般的な形容詞で適用範囲は極めて広いので、*chito neo* には *kip-suerunyot* (後述) のような特定の語感はない。
- 35) この語を私は知らない。*kip-suerunyot* (離乳器を仔牛に付ける者〔直訳〕) が正しい語であると思われる。
- 36) この書物は最初1956年に謄写版刷りで出されたものを、内容に手を加えないでそのまま活字に移したものである。
- 37) 但し、私が直接に面会して彼に質した時には、彼はキマナガン=キマナカイと双方向的にこの制度を規定すべきだという私の意見に賛同した。
- 38) それぞれ *kimanagan*, *kamanaktaet* が正しい語である。
- 39) 以下に、Manners, 1962 をLUと略記する。
- 40) 彼がこの制度をカップティッチと呼ぶ根拠は、「ナンディが何処に彼の牛がいるかと尋ねられると、“*Mii kaptich*.”、即ち“牛は牛の場所(*kaptich*)にいる(*mii*)”と答える」(Huntingford, 1969: 52) ことにあるらしい。だが彼は、ナンディがこの制度そのものをどう呼ぶかについては全く言及していない。私の知る限りでは、ナンディ語にも、*kimanakata*, *kimanagan* の語があるようだ。cf. *kamanaganik* [sic.] (Matson, 1972b)。
- 41) その他のカレンジン語系民族では、ケイヨに同様の制度がある(Huntingford, 1969: 71) し、パラ=ナイル語(南ナイル語)系でカレンジンに系統的に近いといわれるタンザニアのイラクにもクワサラ(*quasara*)という同様の制度があるらしい(同上: 128)。
- 42) カレンジン語では、名詞定形は、単数の多くが -t, 複数の多くが -k の接尾辞を取るので、後の2語は1つの名詞の定形の単数形と複数形であると考えて誤まらない。
- 43) 率直にいうと、ペリスティアニイは不必要な程キプシギス語を多用しているが、不正確であるばかりでなく重大な誤りも少くない。
- 44) 1911年に開かれ、1926年まで戦士階梯にあった年齢組(Huntingford, 1969)。
- 45) 1926年に開かれ、1940年まで戦士階梯にあった年齢組(同上)。
- 46) 母方のオジ及びその子供を示す親族カテゴリー。ここでは後者。cf 注80(51頁)。
- 47) 判り易くするために、筆者(小馬)によって一部修正されている。
- 48) 図1の説明の意図に沿うように、筆者が原図のAとXの記号を入れ換えた。
- 49) 他のカレンジン語系の民族では、軍団が固有の領土を持っている(Huntingford, 1969: Evans-Pritchard, 1940)。キプシギスも1870~1880年頃までは、軍団毎に纏まって移動していた(Lang'at, 1969: 84-85, 小馬, 1984: 10)。
- 50) スワヒリ語の *kodi* に由来。
- 51) *kip* —— 男性接頭辞; *til* —— 切る; *barwa* (<*barwet*) —— 手紙, レシート (<Sw. *barua* —— 手紙)。
- 52) *kip* —— 男性接頭辞; *sir* —— 書く; *got* [*kot*] —— 小屋, 家。Korir (1974: 165)はこの名の別の由来を挙げているが、正しくない。
- 53) 但し、パートンは、この年にかなりの人数が賃労働をし、その時に紫色の印を親指に付けられたことをこの名の由来として挙げている。
この時点で初めて「青」(*bulu*) という色彩のカテゴリーが、牛の体色の1つであり、黒から青を中心とする広い適用範囲を持つ *tui* というカテゴリーから分岐した。この事実にも、伝統的な牛の価値体系に兆した1つの変化の萌芽を読み取ることができる。
- 54) 注39参照。
- 55) この論文では、以下に、Manners, 1964をCN LTと略記する。
- 56) *kitchin toto* とは、恐らく英語の *kitchen* とスワヒリ語の *mtoto* (子供) の合成語で、ヨーロッパ人入植者の家庭で給仕に使われた若い男のことだと推測される。
- 57) 但し、「ルンブワ人(キプシギス人)の常雇い労働者は(キプシギス)保留地の外へ出る傾向が

- あった」(LU:503)ことも見逃せない。
- 58) 実は、オーチャードソンは、先の引用に続けて、「彼の好きな所を何処だって耕せる」と書いている。これをマナーズが、意図的にいい換えたのである。
- 59) マナーズはその意味を説明していない。私は、土を深く掘り起すことによってトウモロコシの出来を良くすることが目的であり、必ずしも作付面積の拡大を狙ったものではないと考える。今日でも、多くの人々が同じ目的でトラクターのサービスを受けている。
- 60) キプシギスが牝牛を売ようになるのは1962～1963年頃からである。ケニアの独立を目の前にしてケニアを離れたヨーロッパ人入植者は大量の混血西欧種の牛 (grade cattle) を売り払った。この時、キプシギスの牛群編成に根本的な変化が起り、混血西欧種の牛を買った人々が、産乳量の少ない在来種を売りに出す。こうして、キプシギスの間に牝牛の売買が行われるようになった。
- 61) キプシギス議会のことであろうか。キプシギス議会は1937年に開設されている。
- 62) 但し、マナーズは、最初に土地私有を企てた人物をアラップ・ベリオンとも記している (CNLT:268)。
- 63) マナーズは、この3つの論文 (KK, CNLT, LU) で、この企てが行われた事を、それぞれ1931年、1930年か1931年、1930年と記し、それが1930年であるか1931年であるか明確にしていない。畑の広さについても動揺がある。
- 64) 多くの研究者が、ソト地方 (Sot) をソティック地方 (Sotik) と呼ぶが、これは誤り。ソトは地方名であり、ソティックはソト人を差す語の複数形。なお、旧チェマゲルに作られたタウンショップはヨーロッパ人によってソティックの名を与えられ現在に到っている。なお、ソティックは現在ソト地方ではなくチェパルング地方に属する。
- 65) 現在ケニアの指名国会議員であり元文部大臣を勤めた T. トウェット氏から直接聞いた情報。
- 66) チェパルング (Chepalungu) とは、“*chepa* (= *chebo*) ——～の娘”と“*lungu* ——～を経めぐる”から出来た語で、一旦分け入ったら仲々出られない深い森の意味。
- 67) セトゥルメント・スキームとソサエティの経営については、小馬、1982: 18—注14 及び Komma, 1984: 173—note 80 を参照されたい。
- 68) ペリスティアニは、これを「オヤジ (老人) の牛」 (*tug ab boiyot*) [sic.] としている (Peristiany, 1939: 204) が、「オヤジの牛」とは特定の語義をもたず、様々な文脈で多用される曖昧な表現である。
- 69) ペリスティアニ (1939) は *tug'ap koita* とするが、これでは「石の牛」の意になってしまう。
- 70) ペリスティアニ (1939) は *panyuek* とするが、正しくない。
- 71) この時期における婚資の増大について、私のインフォマント達の有力な説明の1つは、パックス・ブリタニカによってグシイと通婚するようになったところ、グシイが多数の家畜を婚資として与えたために婚資が増大する傾向が急速に広まったというものである。
- 72) 1983年にソト・ディヴィジョンから分離した。
- 73) 西チェパルング・ロケーションが正式名だが、ソグナイ・ロケーションという通称で広く知られる。
- 74) キマナガン契約は個人の最大の秘密の1つであり、それを細かく実証的に調査するのは大変に困難な仕事だった。
- 75) 以下に次の記号を用いる。まず、キプシギス自身の3分類に従って牛の血統を、混血西欧種、在来種、その混血種に分け、それぞれを G, N, H で示す。それらの記号のすぐ後に付けた数字は雨季における1日の平均産乳量を、キプシギスの慣用計量単位である「壺」(約0.72リットル) で表示したものである。乾季の産乳量は、ほぼこの半分か、それ以下と考えればよい。
- 因みに、キプシギスは、牛の上記3タイプをそれぞれ「2分の1牛」(*nusut*)、「家の牛」(*kipka*) 「4分の1牛」(*roboiyot*) と呼ぶ。*nusut* と *roboiyot* の語源はスワヒリ語の *nusu* (2分の1) と *robo* (4分の1) とである。
- 76) 小馬 (1983: 42-44) を参照されたい。
- 77) この娘は既に未婚の母だったけれども、イニシエーションの隔離明けには2人の求婚者が現れた。彼女の婚資の額はほぼ現在の標準額に近い。
- 78) 因みに、当時の家畜の換算率は、おおまかにいって、未經産牝牛1頭＝去勢牛2頭；牝山羊／牝羊

- 1 頭＝牡山羊／牝羊 1 頭＋若い牝山羊／若い牝羊 1 頭であったという。ペリスティアニは前に示したように、1937年当時のもっと詳しい換算率を示している（Huntingford, 1939 : 154, note 1）。両方を比較すると、いずれも牡獣と牝獣との比価が1対2と評定されており、この点については20年の間に変化がなかったようだ。
- 79) 彼の経産牝牛のうち3頭は、この時点では泌乳していない。
- 80) 一義的には母方のオジ、拡大的にはその息子と娘をも差す関係名称。ママともいう。この関係は、このカテゴリーに当る全員の間というよりもむしろ、特定の個人間の親和的關係として重要である。この例のように、遠い間柄にアブレイ関係を見出そうとするのは必ずしも一般的ではないけれども、この例自体が、アブレイが特定個人間の親和関係として重要であることの逆の証明ともなっているだろう。cf. 注 46 (49頁)。
- 81) キプシギスの慣行では、自分の複数の妻達に対して、経済的にも性的にも、形式面でも実質面でも公平を期す義務がない。男は最も若い妻と起居を共にするのが常である（Komma, 1984 : 170－171）。
- 82) 婚姻儀礼については Komma, 1981 を参照されたい。
- 83) たとえば、長島信弘は、過去50年間にテソ社会では婚資支払いにかかる期間が大巾に延び、その現金化と付加贈与の増大という著しい変化が生じ、他方親族扶助では婚姻のほかに教育費支出の増大という大きな負担が加わり、その結果兄弟間の葛藤が目立つようになり、逆に姻族関係が強化されていると述べている（長島, 1978 : 304, 314他）。
- 84) もちろん、キプシギスが同じ「2分の1牛」（*nusut*）と分類する牛でも血統要因や産乳量にかなりの差が見うけられる。これはあくまでも、ごく一般的な指標として語られることでしかない。
- 85) 去勢牛の場合、血統は問題にされない。
- 86) ロティッチの所有する牝牛にもカロイが1頭いるので、ここではローマ数字で異同を示す。以下同様。
- 87) 去勢牛に限らず、現在では受託者が、自分の都合によって、随時預っている牛の連れ戻しを預け手に要求できる。
- 88) ロティッチは、経済的なゆとりを背景にして、キプシギスの個人が自分の子供の学資や生活資金の調達のために近くの人々を招待して時々行なう募金ビール・パーティ（小馬, 1982b: 7-8, Komma, 1984 : 163-165）にこまめに出席している。私が参加して収集した記録を調べてみると、彼は毎回30～40シリング献金しており、それは常に最高の額であった。なお通常の参加者は5～10シリングを献金していた。
- 89) 原文では、キプシギス語のテキストに英語の逐語訳が付けられている。キプシギス語にも誤りがあり、英文にも意味不明の箇所や誤訳もある。私自身が一部推量して補正したうえで訳出したことを断っておく。
- 90) 西欧型の教育が導入されて以来、その価値を進んで認め子弟の教育に熱心なのは常に女性であった（小馬, 1983a）。ちなみに、カレンジンとして初めてマケレレ大学（当時は高等学校）を卒業し、その後キプシギスとカレンジンの代表的な政治指導者の一人であり続けている T. トウェットは、彼のキプシギスについての民族学的著作（1979）に次のような献辞を書いている——「少しも読み書きはできなかったが、1934年に逝去する幾日か前に、私に学校へ行けと忠告してくれた親愛なる母テムゴ・タパサに捧げる」。親の遺言に背く者には、その遺言が恐ろしい呪詛として作用する。トウェットの母は、いわば一種の呪詛に近い脅しをもってしてまで、息子に教育の重要性を論したのである。
- 91) 不幸にして、フィールド・ノートの一部が盗難あった。このため、この部分では彼等の年齢は記憶に頼っているので、多少正確さを欠く。
- 92) 牛はいわば天下の回りものであると、たとえ誰に所属しようとして、同時に民族全体に所属するものと考えられている。怠惰な牧童を見付けると、必ず小枝で身体を打って叱り、教訓を与える権利と義務が全ての大人に課されていた。この理由で自分の子供が他人に打たれても、感謝することはあっても決して他人を恨むことはなかった。今日、この慣行が行われなくなったのは、老人達によれば、学校教育が普及して「別の形の愛」が唱道されたからだという（小馬, 1983a）。

《参 考 文 献》

- Barton, J., 1923. Notes on the Kipsigis or Lumbwa tribe of Kenya colony, *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 53 : 42-78.
- Chirchir-Chuma, K., 1975. Aspects of Nandi society and culture in the nineteenth century, *Kenya Historical Review*, 3 (1), 85 - 95.
- Ellis, D., 1976. The Nandi protest of 1923 in Kenya. *The Journal of African History*, 17 (4) : 555 - 575.
- Evans-Pritchard, E.E., 1940. The Political Structure of the Nandi-speaking peoples of Kenya, *Africa*, XIII, pp.250-267.
- Gold, A.E., 1978. The Nandi in transition : Background to the Nandi resistance to the British 1895-1906, *Kenya Historical Review*, 6 (1-2), : 84-104.
- Goldschmidt, W., 1976 *Sebei Law*, Berkeley.
- _____, 1969. *Kambuya's Cattle : The Legacy of an African Herdsman*, Berkeley.
- _____, 1976. *Culture and Behavior of the Sebei*, Berkeley.
- Hollis, A.C., 1909. *The Nandi : Their Language and Folklore*, Oxford.
- Huntingford, J.W.B., 1950 *Nandi Work and Culture*, London.
- _____, 1953. *The Nandi of Kenya*, London.
- _____, 1969, *The Southern Nilo-Hamites* (2nd ed, first published in 1953), London.
- Kyewalyanga, F.X-S., 1978. *Marriage Customs in East Africa*, Hohenchaftlarn.
- Komma, T., 1981. The dwelling and its symbolism among the Kipsigis, In N.Nagashima (ed.) *Themes in Socio-Cultural Ideas and Behaviour among the Six Ethnic Groups of Kenya* pp.91-123, Tokyo.
- _____, 1984. The Women's Self-help Association Movement, *Senri Ethnological Studies* (15) : 145-186.
- 小馬 徹, 1982a. 「キプシギス族の“再受肉”観再考」『社会人類学年報』弘文堂, 8 : 149-160.
- _____, 1982b. 「ケニアのキプシギス族における女性自助組合運動の展開」『アフリカ研究』(22) : 1-19.
- _____, 1983a. 「牛牧民カレンジン——部族形成と国民国家」『季刊民族学』(25) : 32-45.
- _____, 1983b. 「災因としての死霊と妖術——キプシギス族の場合」『一橋論叢』90 (5) : 71-91.
- _____, 1984. 「超人的力としての言語と境界人としての指導者の権威」『アフリカ研究』(24) : 1-21.
- Korir, K. M., 1974. An outline biography of Simeon Kiplang'at arap Baliach : a Colonial African Chief from Kipsigis, *Kenya Historical Review*, 2 (2) : 163-173.
- Lang'at, S. C., 1969. Some aspects of Kipsigis history before 1914, In B.G. MacIntosh (ed.) *Ngano*. pp. 73-94, Nairobi.
- Magut, P.K., 1961. The rise and fall of the Nandi Orkoiyot. 1850 - 1957. In B.G. McIntosh (ed.), *Ngano*, pp. 94 - 108, Nairobi.
- Mair, L., 1948. Modern Developments in African Land Tenure : An Aspect of Culture Change, *Africa* (13) : 184 - 189.
- Manners, R.A., 1962. Land use, trade and growth of market economy in Kipsigis country, In P. Bohannan and G. Dalton (eds.) *Markets in Africa*. pp. 493-517, Evanston.
- _____, 1964. Colonialism and Native Land Tenure : A Case Study in Ordained Accommodation, In R. A. Manners (ed.) *Process and Pattern in Culture*, pp.266-280, Chicago.
- _____, 1967. The Kipsigis of Kenya : Culture change in a 'model' east African tribe, In J.H. Steward (ed.) *Contemporary Changes in Traditional Societies*, I, pp. 205-360, Urbana.
- Matson, A. T., 1970. Nandi traditions on rading, In B. E. Ogot (ed.) *Hadith* 2, pp. 61-78, Nairobi.
- _____, 1971. Introduction. *The Kipsigis*, I. Q. Orchardson, Nairobi.
- _____, 1972a. Reflections on the growth of

- political consciousness in Nandi, In B.E. Ogot. (ed.) *Politics and Nationalism in Colonial Kenya*, pp. 18-45.
- _____, 1972b. *Nandi Resistance to British Rule*, Nairobi.
- Mokamba, D. et al., 1974. The Kisii-Kipsigs wars of the late nineteenth century, *Kenya Historical Review*, 2 (2) : 222-234.
- Nagashima, N., 1982. Bridewealth among the Iteso of Kenya : a Further Note on Their Affinal Relationship and its Historical Change. *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, 14 (1) : 14-26.
- 長島信弘, 1978. 「ケニアのテソ族における結婚と姻族関係」『民族学研究』43 (3) : 296-315.
- _____, 1981. 「呪詛と祝福——ケニア・テソ族のイカマリニャン・クランを中心に」『一橋論叢』85 (6) : 1-18
- Ng'eny, K. N., 1970. Nandi resistance to the establishment of British administration 1893-1906. In B. A. Ogot (ed.) *Hadith* 2, pp. 104-126.
- Ochieng, R. O., 1972. Colonial African chiefs-were they sell-seeking scoundrels? In B.E. Ogot (ed.) *Politics and Nationalism in Colonial Kenya*, pp. 46-70, Nairobi.
- _____, 1974. *A Pre-colonial History of Western Kenya C.A.D. 1500 - 1914*, Nairobi.
- Ogot, B.E., 1981. *Historical Dictionary of Kenya*, Nairobi.
- Ojany, F. F. and Ogendero, R. B., 1973. *Kenya : a Study in Physical and Human Geography*, Nairobi.
- Orchardson, I. Q., 1931. Some traits of the Kipsigis in relation to the contact with Europeans, *Africa*, IV : 466 - 474 .
- _____, 1961. *The Kipsigis*. Nairobi.
- Peristiany, J. G., 1939. *Social Institutions of the Kipsigis*, London.
- _____, 1956. Law, In (E.E. Evans-Pritchard et al.) *The Institutions of primitive Society*, pp.39-49, Illinois.
- Saltman, M., 1977. *The Kipsigis : A Case Study in Changing Customary Law*, Cambridge, Massachusetts.
- 佐藤 俊, 1984. 「東アフリカ牧畜民の生態と社会」『アフリカ研究』(24) : 54-79.
- Snell, G. S., 1954. *Nandi Customary Law*, Nairobi.
- Sutton, J. E. G., 1973. *The Archaeology of the Western highland of Kenya*, London.
- Toweett, T., 1979. *Oral (traditional) History of the Kipsigis*, Nairobi (First mimeographed in 1956).
- Waller, R., 1976. The Maasai and British 1895-1905: The origins of an alliance, *The Journal of African History*, 17 (4) : 529 - 553.